



# No more Silver Bullet - Reloaded -

オムニバス

# あらすじ

---

神亀の遷都において【拡張現実】と【I Z n e t】が全都に張り巡らされた科学世紀の京都。

探し物をする【ダウザーの少女】に出会った【秘封倶楽部】の蓮子とメリーは、【岡崎研究室】の面々と共に夜の都に**怪異**を追う！

**No more  
Silver Bullet  
-Reloaded-**

**折葉坂三番地**

🔒

...Neue Weltordnung.

🔒

</SYSTEM>

Izayoi\_net version 3.9.81-b.1 (root@mayohiga.yakumo.ph)  
(prelease/Yakumo/20620401) #1 Fri Nov 4 10:01:32 JST 2065  
Frame rate power: 128  
Difficulty: phantasm

🔒

...All's right with the world. ....\*/  
<SYSTEM>

<Rights>

本作は上海アリス幻樂団様の東方プロジェクトを原作とする二次創作です。  
作中に登場する人物、団体、地名などは実在のものとは関係ありません。

</Rights>

<SYSTEM>

—Hello world.

京都全大教導システム

『Iznet』による。

本サービスは電腦を通じて  
ARRに接続された皆様に京  
都陣内での快適な活動を保  
証するため、必要な知識を  
提供いたします。

現在のバージョンは式群第  
8版。複合体の更新が済  
みでない方は早急に接続を  
解放してください。

また、セキュリティバンクが  
【橙】未満の方のアクセスは  
禁止されています。不正ア  
クセスには電子情報阻害罪  
が適応され、6カ月以上の  
退去または6000新円以  
上の罰金がかかります。

過度な情報の占有は、皆様  
の健康を害します。その他  
規約をお読みのうえ、適切  
な利用へのご協力をお願い  
いたします。

良き京都の未来のため。

</SYSTEM>



■■■ Friday, November 4, 2065 at 10:03 ▼

京都の空は今日も心地よい秋晴れ。

鴨川のせせらぎと、大通りの喧騒を遠く聞きながら、19世紀末のモダンな街並みを再現した合成レンガの赤道を急ぐ。見上げた時計の針は無慈悲に進み、さながらアリスに追いかけられる白兔の気分。

【……つまり、また遅刻なのね？】

【複雑な事情があったのよ。具体的にはレポートの期限とか】

視界の四分の一ほどを埋めてポップする**拡張現実**のウィンドウで、二頭身の分信<sup>アバタ</sup>となったメリーが肩を竦める。ご丁寧にお怒りの**感情拡張子**付きだった。

**複合体**を活性化させたまま私の視界に、交通安全の注意を促す公開メッセージがポップ。メリーとの秘匿通信を邪魔するウィンドウをうんざりした気分で払いのけ、倶楽部活動の相棒に返信する。

【だいたい前時代的ななのよ。この能力至上主義のご時世に学生はプログラム通りの課題<sup>カリキュラム</sup>を

>Dictionary<

【拡張現実(A.R)】

視覚と聴覚の一部に、リアルタイムで感覚処理を施した『拡張した情報』を上書き表示する技術。科学世紀の新たなパラダイムでは医療触媒の投与で角膜上に形成される生器官高分子の受容体コンタクトレンズと、小脳の特定部位に共感覚学習パターンを付与する電脳処置の組み合わせで実現する。

>Dictionary<

>Dictionary<

【感情拡張子】

A.Rを用いた直接感情表現。公開メッセージにおいて自身の態度、快不快、喜怒哀楽を表明するため用いられる。古く前ネット時代の顔文字文化やお気に入り機能に端を発した。

>Dictionary<

こなすべきなんて、仮にも最高学府の教育方針として許されるのかしら？】

【それで分野外のレポートに3日も徹夜して300頁もねえ。蓮子が上手く乗せられただけじゃないの？】

【……3時間は寝たわよ】

<Reference>

<title>統一力場における観測と不可視観測点における論説の因果関係</title>

<author>宇佐良蓮</author>

Last updated: Friday, November 4, 2005 at 05:34

File size: 1339kb

</Reference>

欠伸をカフェインガムで噛み殺し、涙の滲む目元をぬぐう。実際、ムキになって取り組んでいた事は否めない。長い目で見れば自分から卒論のハードルを上げてしまったわけで、メリーの指摘は正しかった。

【そういう訳だから、15分くらい遅れるわ】

【了解。今日は連絡があるだけマシね。いつものカフェで時間つぶしてるわ】

【ん。愛してるわ、メリー】

<Dictionary>

【複合体】

ARを用いた第五世代情報端末。拡張現実の広域化、汎用化に伴い、ハードウェアを要する端末は前世代のものとなり、情報の記録・検索・保存は全て仮想現実を用いた情報複合体へと移行された。

</Dictionary>

<Dictionary>

【能力至上主義】

EROSシステムによって提唱された、個人の能力評価を絶対的な指標とする教育システム及び社会変革。21世紀初頭には人口減少に伴う文化回帰を起した先進国で主流となり、フランスコ計画主導の超エリートたる十一歳組の台頭は世界を牽引する新たな活力となった。

</Dictionary>

【……馬鹿】

肩の上で呆れつつも、【気を付けてね】と追<sup>ポストスクリプト</sup>伸を残し、小さなメリーのアバターが手を振ってログアウトする。

<Advertisement>

【TEMPERANCE.lnc】里香電子ニューモデル、戦車<sup>タンクスフライト</sup>電影の決定版モデル、イビルアイΣ新発売！ 32面多角型攻勢防壁と貫通型論理レーザーで不埒な侵入者をあなたのパーソナルエリアから徹底的に撃退！ 【TEMPERANCE.lnc】

</Advertisement>

<Advertisement>

【鈴掲羅】あの伝説の一夜が蘇る！ オウガトライブOEOE「Astral Knight」復活開催決定！！ ニューロエイジテクノに吹き荒れるアカラナタの風を体感せよ。限定アドレ配信開始ー！ 【鈴掲羅】

</Advertisement>

秘匿通信の終了に合わせ、視界を四角のウィンドウが埋め尽くす。電腦を介しての通信をトリガーに、近くの電子タグからスパムが沸いてきたのだ。顔をしかめてフィルタの密度を

<Advertisement>

【オーレウス魔法店】  
ふわふわの魔法に用はありませんか？ 王子様探しから火星のロケット旅行まで、猫の哲学者たちと一緒にお待ちしています。

【オーレウス魔法店】  
</Advertisement>

<SYSTEM>

フィルタ深度7→9  
広告を抑制しました。  
</SYSTEM>

上げ、邪魔な広告の表示を抑制する。試用期間を過ぎた無料版メールソフトの弊害など、**広告除去マグ**のために月に400新円も払う気も起きず、ずるずると更新をサボって現在に至る。

複合体を操作してレイヤを切り替えれば、道行く人々の公開通信ツィートクラウドが雑踏を横切つてゆく。それを先導するのは景観条例に基づき巡回する牧羊犬たち。今日の仕事の予定、おゆはんの相談、新作トリデオの評判、職場の愚痴、テストの試験範囲、etc。あらゆる情報が形となり溢れるこの光景が、科学世紀の京都の日常だ。

全天候制御機構の管理下、一ドットの欠けもなく描画された青空は、秋に相応しい紅葉の鮮やかさを添えて美しく彩られていた。

「……さて、急ぎますか」

メリーとの待ち合わせは堀川五条だ。地下鉄でもいいのだけど、駅まで迂回する時間を考えて路面電車を使うことにした。近くの乗降場で時刻表を確認すると、次の便までは3分ほど余裕がある。

旧さを残す街並みの調和を乱さぬよう、景観条例に配慮した広告が、ARの視界にポップして秋の新商品を控えめに宣伝する。秋の新製品を宣伝する仮想ウィンドウの一枚に、一体どれだけコストがかけられているのか想像して、ぼんやりと時間を潰した。

情報通信という名前の神の遍在が世界をくまなく覆い、現実の上にもう一枚、拡張現実の層を上書きするようになって35年。神亀の遷都を経て、いまや京都は世界の最先端を走

>Dictionary<

【フィルタ】

情報のろ過、純化を行う汎用ツール。ARにおいて情報とは本人への関係性、速報性、特筆性を合わせてその重要度(重さ)を分類される。これを利用して、関係度の低い情報が使用者のARに表示されることを抑制することを目的とする。

>Dictionary<

>Dictionary<

【マグ】

マグネイト。第三世代以降の電脳における動作処理を行う機構の総称。もともとは広告宣伝を行うソフトの商品名であったが、商標登録の抹消と共に一般名詞化した。

>Dictionary<

る、最も騒がしい国の一つだ。人々はその恩恵を当たり前のように享受し、科学世紀の日々を生きる。かつてのこの国で、水と安全が無料だと思われていた頃のように。

### <Notice>

まもなくトラムが到着します。通行の邪魔にならぬよう、下がってお待ちください。

次は石動不動、石動不動。

### <Notice>

トラムの到着を告げる合成音声<sup>マイクボイス</sup>。程なく停車する2両建てのトラムに足を踏み入れかけたところで、何気なく上げた視線が小さな違和感を捉えた。

### 「……ん？」

通りの反対側、共用複合体を展開する街頭端末の前で、周囲から酷く浮いた色合いがある。フード付きのグレーのパーカーに、それをやや濃くした色合いのスカートを身に付けた女の子だ。旅行鞆を抱え、難しい顔をして案内板と手元のメモとをしきりに見比べている。ネズミ色の小さな背中中、情報に満ち満ちた京都の街並みの中で、ぽつりと残るドットの欠けを連想させた。

このご時世に、紙媒体のメモを好む人は希少だ。わざわざ嵩張る筆記用具を用意しなくとも、ARはあらゆる記録手段に対応しているし、それらに適さないやり取りには複合体が用

### <Dictionary>

#### 【広告「スト」】

京都では景観条例に基づき、過度な広告は規制される傾向にある。広告がフィルタを潜るよう情報に重みづけをするには、企業側にも高額の費用と社会貢献が要求される。

### <Dictionary>

#### <Dictionary>

#### 【京都】

この国の首都。前世紀から今世紀にかけてのこの国家一大事業となった神亀の遷都により、二百年を経て正式に首都となった。特筆すべき点として拡張現実(AR)が生活の基準となり、出生登録と同時に電脳処置が推進されていることが挙げられ、住人のARへの対応率は88%（二〇六五年八月現在）を越えている。

### <Dictionary>

いられる。現在の電子媒体は黎明期のように脆いものではないのだ。経年劣化という観点で見れば、石板に刻んだ楔文字のほうがよほど保存性において心もとないとされる。

それでも敢えて紙を用いるのは、よほどの好事家か、物理メディアの収集と保存を愛好する愛紙狂であるか、あるいは——ARへの対応を行っていないか、だ。

電腦のサスペンドを解き、簡易複合体で周囲のPANを探る。仮に電腦自体を高度に自閉させていたとしても、受動型情報媒体のPANは常に発現している。だが、私からのリクエストに対しても彼女のPANは反応せず、公開プロフィールも未登録。

「……やっぱり」

間違いない。おそらく彼女は、目の前に展開されているARが読めていないのだ。

それがこの街でどれほどの不便を被るか、私は身をもってよく知っていた。

路面電車への乗車を促すメッセージを背にして、秘匿通信でメリーにもう少し遅れる旨を送信。すぐに返ってくる抗議は読まずに畳み、私は乗降場を飛び出し、道路を渡って彼女に話しかける。

「ねえ、あなた！」

「うん？」

近付いてみれば、随分と小柄な女の子だった。私もあまり背の高い方だとは言いが、頭一つ下から陰しい視線がまっすぐにこちらを見上げてくる。目深にかぶったフードから覗く大きな目は油断なく私を値踏みするように動き、警戒を隠そうともしていない。

## >Dictionary<

### 【PAN】

仮想現実下における個人のプライベートスクエアを示す区画。外部アクセスアークの通信の秘匿、プライバシーが保持される。2者が秘匿通信を行う初期条件には両者のPANが接触していることが求められ、結合したPAN間では緩やかな情報の共有が行われる。

</Dictionary>

予想通り、明らかに近接状態なのに、PANの結合距離すら提示されない。それは取りも直さず、彼女が電脳に関する一切の支援を受けていないことを示していた。

「なんだい、君は」

迷惑だから放っておいてくれと言わんばかりの不機嫌な声音に、あからさまな渋面。ARの感情拡張子に慣れているとつい忘れてしまふ、拡張現実に加工作されていない生の感情を向けられ、思わず言葉を飲みこみそうになる。

どうにも歓迎されている気配ではないが、それは無視して先を続けた。

「あなた、もしかして困ってないかしら？　なんだったら助けになるわ——」

「勧誘なら間に合っているよ。構わないでくれ」  
間髪入れずの有無を言わせない強い口調。明確な拒絶が私の言葉を跳ね返す。高精度の防壁プログラムでもここまでのものはなかなかないだろう。

<Advertisement>

【maniac.pr】民事トラブルの解決なら、小兎姫におまかせ！ 元検非違使局のエリートがあなたに最適な護法<sup>ガイド</sup>を提供します！　ただいまオープン一周年記念に付き初回相談料無料、料金10%OFFキャンペーン中！　【maniac.pr】

</Advertisement>

<Dictionary>

【PANの結合距離】

PANが接続・結合される距離は、個人に設定が委任されている。一般的には距離が近いほど情報の共有深度も深まり、相手との親密さを示す指標とされる。完全共有化は物理的接触を伴う最近距離設定が一般的でこの零距离をもて恋人や夫婦という特別な関係の証とする俗説がある。

</Dictionary>

「ああもうっ……！」

派手な広告が視界を埋める。『お困り』のキーワードをトリガーにポップした邪魔くさいスパムウインドウを握りつぶすようにして畳み、フィルタを再調整。

そうしている間にも、彼女は私に背を向け、案内板に向き直っていた。もう話すことはない小さな背中が語っている。

取り付くしきもない態度に、余計なお節介だったかと諦めかけた私だったが——助け船は意外なところからやってきた。

「……こら、なんだ」

もぞもぞと身体をよじった彼女の胸元から、チウと小さな鳴き声上がる。長毛の白いネズミが、少女のパーカーの胸ポケットからちよこんと顔を覗かせる。彼(?)はポケットから飛び出し、素早い身のこなしで彼女の肩へと飛び乗った。

「む。……いや、しかし……ん、むう」

そのまま、白ネズミ君は少女の顔を覗きこんで忙しく鳴く。困惑する彼女の目を見つめ、小さく鼻先を動かしながら前足を擦りつける様は、まるで会話でもしているかのようだ。

しばしの後、彼女は困ったように頬をかいた。

「……わかったよアル。私が悪かった」

肩上の白ネズミの頭をそつと撫でてポケットに戻し、少女はこちらに向き直った。姿勢を正してぺこりと頭を下げる。

SYSTEMA  
フィルタ深度9→14  
広告を抑制しました。  
SYSTEMA



「……すまない。折角の申し出に、失礼なことをしてしまった。知らない土地で少しばかり意地になっていたようだ」

そうだぞ、とばかりに白ネズミが鳴く。器用に後ろ脚で立ちあがり、小さな前足を少女の鼻先へ。勘弁してくれとばかりの困り顔で、彼女は額を押さえて苦笑い。なかなかの名コンビぶりである。

「つまらないことに意地を張ってしまったのは私の悪い癖だな。いまさら申し訳ないことだが、どうか許してもらえないだろうか。この通りだ」

もう一度、改めて頭を下げる彼女に、私は感情拡張子を示しかけ——彼女には見えていないのだと思いなおして、はつきりと伝わるよう首を横に振る。

「気にしないで。京都は初めてかしら？」

「以前には何度かね。久々に来てみたら大分様子が変わっていて驚いていたところだ。正直、道もよく分かっていないくらいでね」

「京都のA Rへの依存っぷりは半端ないからね。私もここの出身じゃないけど、もう少し**電脳未対応者**にも配慮があつていいような気がするわ」

現実問題として、科学世紀の京都において、電脳に触れられないことはそれだけで多くの不自由を被る。本来、先天的なハンディキャップを埋めるために発展したはずのA R振興政策が、気付けば電脳をもたない人々を置いてきぼりにしてしまっている現状は、普及率の影に隠れてしまっている潜在的な問題だろう。

## >Dictionary<

### 【電脳未対応者】

拡張現実をはじめ、生体電脳処置を忌避する人々の総称。住々にして心因性の忌避症状を伴う。拡張現実の発展の過程で、A Rによる情報の表示、共有が行われるという作用の誤解から、他人の頭の中を覗かれるという妄想が症例として多く報告される。

電脳化が一般化するに従い、処置の拒否者は減少したが、自然崇拜主義者を中心に根強い反対論もある。電脳処置拒否者は近代化都市において情報障壁を持つものとして扱われるのが一般的である。

</Dictionary>

私が京都の現状と、拡張現実についてかいつまんで説明すると、彼女はなんとも渋い表情を浮かべる。

「……そういう理屈か。ずいぶん面倒な時代になったものだね。コンピュータに繋がっていないければ地図の読み方一つも分からないというのは、なんとも格好が付かないな」

彼女が睨めっこをしていた案内板は、公共複合体を介して京都全土の詳細な情報を提供するシステムだが、AR未対応者に対してはただの概略地図同様だ。スペースの都合もあって視覚情報としては最低限の情報しか記載されておらず、これで詳細な道を把握しろというのはそもそも無茶な注文と言えた。

ARさえ利用できれば、個人所有の複合体を介して地図情報や移動への最短経路、観光情報などにも容易にアクセスできるのだが——彼女にはその恩恵がまったく及んでいないのである。

「もしよければ、言葉であれこれ説明するよりも実際に体験してもらおう方が早いと思うわ。あっちの案内所で、AR対応機器が借りられるのよ。着いてきてもらってもいい？」

「すまない。助かるよ」

行政府もこれらの問題にまったく手放しというわけではない。主に国外からの旅行者を対象に、京都の滞在に不自由がないよう、AR対応機器が無料で貸し出されている。医療触媒か電腦、どちらの処置を受けていればその補助機器で済むのだが、彼女はそのどちらも持たないレアケース。

>Dictionary<

【医療触媒】

体内環境を保全、維持する生体性ナノマシン。病原性細菌ウィルスに対する抗体反応の補完のほか、生体器官高分子を生成して身体機能の補助を行う。

</Dictionary>

従って、必要なのは電腦を備え、生体電位で駆動する知性眼鏡<sup>スマートグラス</sup>。複合体の機能も備えた一種のウェアラブルコンピュータだ。

案内所のお姉さんは、行政職員特有の控えめな感情拡張子で対応してくれた。彼女の代わりに手続きを代行し、ゲスト登録はものの1分で終了する。

物珍しげに赤いフレームの知性眼鏡を受け取り、彼女はそれをしげしげと眺める。メーカー品であればもっと洗練されたデザインのARグラスもあるのだが、さすが官公庁の支給品、野暮つたい上縁眼鏡だった。まあ、それでも初期の丸縁瓶底タイプからはだいぶ進歩したのかもしれない。

「最初はちよつと戸惑うかもしれないけど、慣ればいろいろ便利よ」

「……おお」

身につけたグラスを調整し、レンズ越しの視界を確かめるように周囲を見回す。おそらくいま、彼女は視界を埋め尽くす広告と公開通信描画の洗礼を受けている最中だろう。肩上の白ネズミくんも、ペット用のフリーサイズARグラスを装着し、主人と同じように首を巡らせていた。ボーダーレスの京都では、彼にだってARの恩恵を受ける権利は十分にある。

この知性眼鏡、度は入っていないが、要するに限りなく解像度を上げたディスプレイで視界全体を覆っているようなもので、慣れない人は徹底して慣れない。京都ではそれらは電腦対応障害として治療されるべきものとされるのだ。

「……ふむ。大体こんな感じか」

△SYSTEM△

新規のPANを感知しました。結合を許可しますか？

↓Y/N

▽SYSTEM▽

△SYSTEM△

新規のPANと結合を行いました。プロファイルの設定をしてください。

▽SYSTEM▽

行政府お手製の説明書——これも電腦処置未対応者のための紙媒体だ——を受け取り、一通り使い方に目を通すと、彼女はすぐに拡張現実慣れたようだった。フレームに触れる仕草はなかなか堂に入ったもので、さつきまでA Rを使えていなかったとは思えない。これなら大丈夫かと判断して、私はポップした公共P A Nの公開通信を経由して、案内板の読み方を伝える。

「——だいたい、こんな感じね」

「ありがたい。助かったよ。これでなんとか行けるだろう。……ついでも聞くのは心苦しいのだが、このあたりで古い美術品や古道具を扱う店に心当たりがないだろうか」

「美術品？」

聞けば彼女、上司に頼まれてあるものを探しに京都へとやってきたのだという。地図の前で悩んでいたのはそのお店を探してのことだったらしい。

「一応、美術品の類なのでね。紛失時期からするとなんとも言えないんだが、もしかしたらそのような店に並んでいる可能性も考えておきたいんだ」

「んー、そうねえ。お勧めの飲み屋ならいくらでも出てくるんだけど——」

「それは乙女としてどうなんだい」

さっそく使い方がわかったのか、呆れを示す感情拡張子が彼女のP A Nに飛び出した。

いわくつきの怪しげな古道具といえ、我が俱樂部活動の範疇<sup>アンダ</sup>と言えなくもない。私もとあるツテで数軒、そうした店を知っているが、どちらかというと非合法の部類に属するし、

△Notice

【！】

ご使用の機器は、医療触媒による高精度感情追随<sup>フィードバック</sup>固有嗜好フィルタの設定などいくつかの有料サービスには対応しておりません。最新の複合体に更新することをお勧めいたします。

△Notice

さすがに京都市内を網羅するほど詳しくはなかった。複合体を展開し、検索を試みる。

いくつか条件を加えて候補を絞り込むと、御池から丸太通りへ抜ける寺町通りの近辺には、  
そういった小道具や民芸品を扱う店が複数ヒットした。

</information>

</root>

・四条烏丸・↓←南西1.2km 徒歩20分

・河原町・↑北0.9km 徒歩15分

</root>

</information>

「このあたりかな」

彼女にARグラスの操作を促して、接続したPANから招待した彼女の電腦にゲスト権限を付与し、検索結果に街頭カメラとInternetの画像を添付して送りつける。

「何度か冷やかした程度だけど、私も見た覚えがあるわ」

「なるほど……了解した。本当にありがとう。何から何まで世話になってしまったね。なにかお礼ができればいいのだが」

「気にしないで、困った時はお互いさまでしょ」

</Search>

【?】

何か知りたいことがありませんか？ 検索項目を選んでください。

</Search>

そう言つて手を振ると、彼女の肩から飛び降りた白ネズミが私の指先にちよんちよんと鼻先を触れさせた。彼なりの感謝を示してくれたらしい。

ぺこりと頭を下げ、雑踏の向こうに消えてゆく一人と一匹を見送つてしばし。

トラムを2本乗り過ぎ、過ぎたのに気付いた時には、メリーからの抗議と催促のメールの山が、複合体にぎゅうぎゅうに溜まっていた。

■■■ Friday, November 4, 2065 at 11:21 ▼

「やっぱり信用するんじゃないかったわ。珍しく連絡してきたと思ったらこれだもの」

「悪かったってば。おひさまの出てる間は時間が分らないのよ」

お怒りのメリーさんは感情拡張子を四倍角で表示させ、鬱憤を晴らすかのようにケーキにざくりとフォークを突きたてた。ずいぶん大きなひと切れ構わずをそのまま口に運び、口いっぱい頬張っていく。実にワイルドな食べっぷりながら、音も立たなければスポンジの欠片を落ともしないのがまた凄い。放っておくと私の分までなくなってしまうような様子に、慌てて自分のお皿を手元に引き寄せる。

「あむ。それにね、私だって別に悪いことしてたわけじゃないのよ？」

「わかってるわよ。蓮子の遅刻にいちいち怒ってたら友達なんてやってられないもの」

赦免の気配にそうそうと領けは、【反省しなさい】の大文字が突っ返される。

まあ、私達の日常は概ねいつも通りと言えた。

当初の予定より一時間十四分遅れで合流した私達は、五条から京都駅前のカフェへと場所

を移して、本日の議題である今季の新メニューの品評会を行っていた。

秘封倶楽部、久々の女子力に溢れる会合である。面子に変わり映えがないというのが少々寂しいかもしれないが——この活動に新メンバーが加わる事はちよつと想像が付かない。

私の頼んだガナツシュはいかにも合成品のトレンドで、甘みがソートを掛けたように揃い過ぎているのがちよつと残念な出来栄だったが、メリーの注文したベイクドチーズケーキは濃厚な味わいのなかなかの逸品である。

これでカロリーも抑えてくれれば言うことなしなのだが、他者の命を食べることなく食事を出来るようになったこの科学世紀でも、それらに目立った改善は見られない。美味しいスイーツにつきものの高カロリー問題は、乙女としては一番切実な悩みに直結するところなのではないかと思うのだけでも。

「——メリー、ちよつと食べすぎじゃない？」

本日3つ目のケーキにフオークを付けたメリーのPANに、健康的な生活習慣を逸脱していると糖分・脂質の過剰摂取を主張する医療メッセージがポップ。シグナルカラーは注意の黄色を通して警告の赤だ。情報を共有する私の視界にも割り込んでくる健康管理ソフトのメッセージを、メリーはぼいっと背後に投げ捨てた。仮想ウィンドウはぱりんと軽い音を立てて割れ、薄れて消えてゆく。

「蓮子は律儀ねえ。古来、美味しいものは身体に良くないって決まってるの」

それは料理への冒流じゃなかるうか。思いはすれど、一人の乙女として主張自体は多いに

▽Notice▽

【一】

糖分、脂質の一日の摂取許容量を超過しています。

▽Notice▽

▽Dictionary▽

【ウォッチミー】

健康で文化的な生活を営むための体調管理ソフト。体内の医療触媒と提携し、栄養状態や精神状態を監視、各種栄養素や化学成分摂取量の監視を行う。

▽Dictionary▽



同意できるところであった。

「だから、今時ブラックで珈琲なんて正気の沙汰じゃないのよ」

「えーえー、その通りですね」

メリーの指摘通り、私もカフェインの摂取量は成人女性の許容量をはるかにぶちぎっているのでまったく人の事は言えない。いかな管理社会と言えども、人間の業とも言うべき自堕落さは根が深いのである。

「不毛なカロリー摂取の問題は置いとくとしても、拡張現実がもつと発展すれば、味覚や嗅覚の感覚拡張くらいどうとでもなりそうなものだけだね」

「どうかしら。食べ物がみんなハンバーグの味になるなんてぞつとしないわ。ただでさえ合食ばっかりなのに、この上味までデジタル化なんて断固拒否よ」

【甘味…160】、【旨味…87】、【苦み…24】、【塩味…12】——そんなカラーバーを噛み砕く自分を想像し、思わず首をすくめた。

「味って人間の生命維持に関わる本質的な問題よ。個々の主体的な認識が揺るがされれば、人の禁忌だってあっさりとか脅かされちゃうと思わない？ 極論、人間の肉の味まで好きなように操作できたら、今より人肉食は一般的になると思うわ」

「蓮子は前時代的ねえ」

私の危惧をばっさり切り捨て、新茶道の抹茶オレを傾けるメリー。相対性心理学専攻のメリーは、仮想と現実の境界はシームレスに繋がっているという主張の持ち主だ。極論、十分

△Notice△

【1】  
カフェインの摂取量が過剰です。たぐいに該当成分が含まれる喫食服用を中止してください。  
△Notice△

に快適な環境が提供されるのであれば、人間はコンピュータの苗床にされても構わないという主義である。これはメリーに限った事ではなく、ARに生まれた時から接している京都市の若者には多く見られる傾向であった。

東京の片田舎に育った身としては、現実と仮想を等価にみる視点はいまいち賛同し難い。「で、それからどうなったの？ そのお寺から出た後よ」

「いつも通りよ。歩いていった先に湖があったの。遠くには前に見た紅いお屋敷も見えた気がするわ。なんだか岸の方で水音が聞こえたから行ってみたんだけど、底に綺麗な石がたくさん沈んでね。それを拾おうとしたら、水の中に落ちちゃって、眼が覚めたらベッドの上」

「むー。変わり映えないわねえ。倶楽部活動の充実のためにも、もっと面白いお話を要求するわ。人魚と泳いだとか、狼男に追いかけられたとかあったっていいじゃない」

「無茶言うわねえ。できたら苦労しないわ」

私とメリー、二人が顔を揃えていれば、そこは秘封倶楽部の活動場所である。今日の話題も、メリーが夢の中で訪れる『境界の向こう側』の世界の話だった。

我が相棒、メリーことマエリベリー・ハーンには境界を飛び越え、時間も空間も隔てた異邦で、さまざまな不思議と邂逅できる能力がある。それが最も発現するのは、幻と現の境界が揺らぐ彼女の夢の中だった。メリーが夢の中から持ち帰る不思議で素敵な体験は、少し前までは我らが秘封倶楽部の活動の根幹を為す貴重なものだったのだが——最近、どうにもその価値は揺らいでいる。

イザナセオジニク

伊弉諾物質を探す活動が倶楽部活動のメインになり、こちらの世界にも不思議の痕跡は山のように転がっていることが分かったことがひとつ。

そして、正直もう割と慣れっこになってしまっているのがひとつ。

「で、今回は何を持って帰ってきてくれたの？」

「タケノコよ」

「……また？ ああ、見せなくたっていいわよこんな所で」

このやり取ももう両手の指にも余るほどだ。ちよつと誇らしげに見せてくれるメリーさんだが、天然のタケノコなんて正直もう珍しいものではない。最初のころは天然食材として高く売れたりしましたが、最近はネットに監視が入ってしまい露店に投げ売りするくらいしかできなくなってしまうている。

「蓮子。せつかく持ってきたのにそういう言い方はないんじゃないかしら。今日のタケノコはちよつと違うのよ？ ほら、なんと光るの。ねえ、おかしいと思わない？ タケノコって普通光るものかしら？」

「……そりやそうかも知れどさ」

冷えた珈琲を啜りながら、ここ最近の『収穫物』を保存・分類したタグを全部まとめて秘密通信に添付し、メリーに送りつける。隣り合うPANに共有された仮想ウィンドウで、拾得物のリストがメリーの視界を埋め尽くしていた。

「いくら光るたってそれだけじゃねえ。その手のサンプルはもう十分なの。中でお姫様が

眠ってるのならともかく、ね」

「うーん。虫籠に住んでそうな小人さんには会ったことあるのよねえ」

「寝てる間にレポートを仕上げてくれるなら大歓迎だわ。喜んでお迎えしたいくらい」

メリーの『収穫物』に、最初のうちは私も興奮し、未知や境界への手掛かりとなるかもしれないと躍起になって調べたりしたが、要するにただの木の枝や石ころやらである。

砂粒一つにまで所在が指定される京都では滅多に確認できないもので、アカデミックな観点からすれば貴重なサンプルであることまでは否定しないが、そもそも違法行為である結果暴き得たものを大っぴらに解析できるわけもない。

かくして我が家を埋め尽くす出所不明の収穫物の山の出来上がりというわけだ。

「だからってぞんざいに扱っていいって物でもないでしょう」

感情拡張子で憤慨を表示させつつ、メリーは仮想ウィンドウのリストを丁寧に畳む。

「あのねメリー。持ってきてくれるのは結構なんだけど、**保管場所**用意するだけでも一苦労なのよ？ 確かに私も最初はいろいろ焚き付けちゃったけど」

『収穫物』の大半は、メリーがわざわざ夢の中から持ち帰ったのだと主張しない限り、ぶっちゃけゴミのようにしか見えないものも多い。ただでさえ広いとは言いがたいが家のスペースをぐんぐん圧迫してくれているため、先日ついに耐えかねてあまりにも意味不明な資料は処分したばかりだ。

「きちんと整理してないのが悪いんじゃないかしら。……もう少しきちんと片付けたら？」

## >Dictionary<

### 【保管場所】

景観条例のため新規住宅工  
リアの建造が見込めない京  
都において、私的空間の占有  
には高額なコストが要求さ  
れる。人口一極集中は依然  
として加速傾向にあり、行  
政府には早急な対策が求め  
る声が多い。

## >Dictionary<

「う。ちゃんとどこに何があるかは分かってるからいいのよ」

収穫物はきちんと折半しているので、メリーの部屋も同様のはずなのだが、彼女は困っている様子もなく平然としている。それだけ彼女の部屋に余裕があるという事なのだが——同じ一人暮らしの学生の身でどうなったんだこのブルジョワめと内心微妙に穏やかでないのは私だけの秘密。

テーブルの上、泥のついたタケノコ（確かにぼんやり光っていた）をつついてメリーはこちらを見る。

「どうする？ 食べちゃう？」

「あんまり気が進まないなあ」

以前にも同じように竹林から持ち帰った天然もののタケノコを、二人で料理して食べてみたりしたが——アクが強くて味も雑で、正直食べられたものではなかった。偉そうなことを言って合成食品を批判してみても、生涯を合成品に囲まれて生きる科学世紀の少年少女にとって、天然食品はもはや希少性以外に価値を持たないのかもしれない。

### <Quotation>

栄養デザインの進歩で作られた合成食は、味や匂い、触感についても天然の素材を凌駕していることが証明されて久しいが、なお昨今でも人間は天然物を歓迎する傾向にある。ただのもの珍しさ、希少性以外の理由で天然物を要求するのは、舌や喉の感じる味以外

に、人間には魂のデザインレベルで他者の命を口にすることが本能的に備わっているのではないかという推論があり、今も根強い天然への信仰となつて残っている。

</Quotation>

</tie>科学世紀の食育に関する考察</tie>

<author>朝倉理香子・著</author>

【異議…蓮子も私も料理が苦手だつて可能性】

【……異議を却下します】

不毛な会話を打ち切つて、A Rのウィンドウを切り替え、メリーの話してくれた夢の内容をまとめたメモを表示する。

「……綺麗な石が沈んだ湖ねえ。同じお屋敷が見えるつてことは、前にでてきた霧の湖と同じかしら。あつた、これだ」

「ああ、あの大きなお魚の住んでたところね」

メリーが夢の中で迷い込む境界の向こうの世界に付いて、記録を取りはじめたのはもうかなり前からのことだ。夢日記のログはかなりの分量になつていた。

メリーの夢の多くは森の中や広い草原、湖のほとりなどを歩く程度の、実にささやかな体験がほとんどで、化け物に追いかけられたり、不思議なメイドさんとお茶会をしたりといったものは数えるほどしかない。人の手の入らない自然というのもいまの時代には珍しいもの

になりつつあるので、決して馬鹿にしたものではないのだけど——それは学術的な見地からの意見だ。

「私としてはやつぱり、いつかのトリフネみたいな非日常が欲しいのよねえ」

呟いてテーブルに突っ伏した。地上から遥か38万キロの彼方に静止する**衛星トリフネ**の中に満ち満ちた不思議と大自然が、ありありと瞼の裏に蘇る。

隔壁1枚向こうには虚無に近い真空という、宇宙のただ中に再現された蒸し暑い太古の森。分厚い苔や太い蔦に囲まれ、緑の葉を茂らせて曲がりくねった根を伸ばす大樹。色鮮やかな花を咲かせる原種のラン。人工重力に包まれた在りし日の地球の森を飛ぶツノゼミやモルフォ蝶——その後に起きた事件も含めて、あれは一生忘れられないとびきりの体験だった。

だというのに、メリーさんときたらのんきにケーキを食べながらいま思い出したとばかりに言い出すのである。

「トリフネなら先月にまた行ってきたわよ？」

「もー、なんで今そういうこと言うのよー！ 事前に言ってくれなきゃ準備もできないじゃない！」

まったくもってやってられない。不満の感情拡張子を露わに、目の前のウィンドウを全部放り投げる。ぱりんぱりと割れては消えてゆく仮想ウィンドウを尻目に、コップのストロークをくわえてぶくぶくと息を吹き込んだ。

「ずるいわよメリー、あっちに行くなら教えてくれなきゃ」

## △Dictionary▽

### 【衛星トリフネ】

58年に打ち上げられた宇宙ステーションの通称。本来は衛星ではないが、後述の理由と閉鎖空間における生態系を維持する環境維持モジュール『鳥船』の名をとってこう呼ばれる。軌道上での事故によって損壊したと思われるが、地球・月系のL4ラグランジュポイント、トロヤ点に静止していることが判明した。地上よりの管制は失われ、現在に至るまで復帰の用途は立っていない。独自のテラフォーミング理論をもとに開発されたとされており、その対象は太古の地球環境である。

<Dictionary>

「そんな事言われても。夢なんていつ見るのか分からないし」

不貞腐れた私はふー、とテーブル上の紙ナプキンを吹いて飛ばす。汗をかいたグラスに触れて張り付くナプキンを剥がし、メリーは行儀悪いよと眉を潜めてみせた。

長野のサナトリウム以来、メリーの見ている光景を共有できるようになったのはとてもありがたい事だけれど、彼女が境界を越える時にいつもいつも私が傍に居るとは限らない。どうにも巡り合わせが悪いのか、最近はそんな貴重な経験の度に置いてきぼりをくらうことばかりだ。

メリーが境界を越える夢を見る条件を探してみたことがあったが、いくらサンプルを増やして解析しても、規則性は全く見られなかった。そもそもこの夢日記自体、その条件を探するために付け始めたものだ。今はだいたい惰性になつてはいるけれど。

「でも、何か手段はあるでしょ？」

「私、眠ってるのに無茶言うわねえ……。じゃあ、いつそ一緒に住む？」

「それもいいわね」

悪くないな、と思いつながら、カップの残りに口を付けた。温くなった珈琲の苦みが喉を落ちてゆく。健康への影響を訴える五月蠅い警告メッセージを畳み、荷物が増えるからメリーの家につ越すのが良いかなあ、などと想像を巡らせる。

「でも、蓮子と一緒だとあつという間に部屋が散らかりそうねえ」

「失敬な。あれはあれでちゃんと機能性を保持してるのよ？」



「この前貸した部屋の鍵」

「う」

「東京で観ようって言った映画館のチケットも返してもらってないし、延原図書館で借りた星座の本に、共通科目の試験対策で貸したメディアもあったわね。それに——」

我が家で行方不明になっているものを指折り数えてゆくメリー。相棒の両手の指がなくなつたところで、私は降参して両手を上げた。

「ごめんなさい。反省してます」

「よろしい。私のは後回しでもいいけど、よそから借りてるのは早く返しなさいね」

「……善処いたします」

これらはタグの設定をサボっていたせいで、A R リスト表示でも探せない状態にある。熱力学第二法則は乙女の部屋においては未だに有効な理論だ。そもそも目的のものがP A N の感知領域に入らなければ拡張現実もまったく役に立たないのであつて。

……閑話休題。

「でも最近、ちよつと活動がマンネリなのは確かね。そろそろまたどこか旅行でも行きたいところだわ……つと」

メリーが退院してからは伊娃諸物質を探すという名目で遠方での活動に精を出したが、学生的身でそうそう頻繁に遠出ができるような財力があるわけがなく。最近はおっぱら京都から日帰りできる近郊での活動がほとんどだ。いつだったかの月旅行も断念したままだし、そ

<Advertisement>

【第八大陸開発公社】

この冬、旅行をお考えのあなた。あの空に浮かぶ月まで38万キロの旅はいかがですか？ 月のウサギと一緒に巡る月面ツアー。ご好評につき、申し込み期間延長決定！

【第八大陸開発公社】

</Advertisement>

ろそろ新しくバイトでも始めるべきだろうか。

丸まってしまった背中を伸ばそうと、椅子の背もたれにぐっと反りかえって後ろを見る。

「もう、お行儀悪いわよ蓮子」

メリーが苦笑と共に【見えちゃうわよ】と秘匿メッセージを飛ばしてくる。親友の有り難い警告に従ってそそくさと服の裾を直していたその時。

「……あれ？」

反り返った背中、上下さかさまの視界の中に、ついさつき別れたばかりの見覚えのある姿が一つ。

「おや」

彼女もすぐ私に気付いて声を上げた。

シンプルなデザインの赤いフレームのARグラス。グレーのフード付きのパーカーと紺のスカートのシックな装いは、曇天ならばともかくも、ARで加工された京都の青空の下では些か目立つ色合いだ。

忘れようはずもない。さつき会ったあの子に間違いなかった。

「なんだい、君もこちらに用事だったのか」

「さつきぶりね。……でも、どうしたの？ 寺町通は反対側よ？」

「……なんだって!？」

眼を見開く彼女に、現在位置の座標タグと地図を添付して公開メッセージを添付。彼女は

少なからず驚きを露わにして、A Rと地図を見比べた。

二度、三度と繰り返し返すうちにみるみるその表情が陰しくなり、やがて彼女はがっくりと肩を落とす。

「なんということだ……これはいよいよ本気で焼きが回ったか……？」

よほどシヨックなのだろう、ふらりと近くの植え込みのブロックに寄りかかり、ぶつぶつと独りごとを呟き始める。

「ふふふ、酷い様子じゃないか……賢将が聞いて呆れるな。ああ、所詮、いかに賢しく振舞おうが卑賤なネズミ風情と言うことか……ふふ、ふふふふ……」

みるみる瞳からハイライトが消えてゆくのはA Rグラスによる感情拡張子の補正効果だろうか。大分自虐が入っている彼女を不思議そうに見て、メリーが首を傾げる。

【その子、蓮子のお友達？】

【さっき話したでしょ。駅のところであつた、探し物をしてるって言う】

【ああ】

秘匿通信の内緒話に、ぼむ、と手を叩いてメリー。

「うーん。やっぱり一緒に道案内してあげれば良かったわね」

「……面目ない。君の忠告に従ったつもりだったが、どうも私は自分で思っていたよりも抜けているらしい。少し、自分の能力について本気で悩みたくなった」

飛び出す落胆の感情拡張子。まあ、そんなものを見るまでもなく、思い切り落ち込んでい

るのは明白であった。

「さつき使い始めたばかりだもの、慣れないのはしょうがないと思うわ」  
フォローを入れたつも、少し違和感もあった。

基盤目模様の京都の道は、現在地こそ把握しづらいが、右左を間違えるほどややこしい構造ではないはずだ。彼女がよほどの方向音痴だということのでもなければ。

あるいは、いくらボーダーレス思想の設計と言っても、やっぱりA R自体に触れていない人には得手不得手ができてしまうということなのだろうか。まあ、どんなに精巧な地図や案内板があってもその土地に不案内であれば迷ってしまうことはあるかもしれないけれど。

「蓮子と同じに考えちゃ失礼じゃないかしら」

「うーん。そんなややこしい教え方したつもりなかったんだけどなあ」

確かに私の眼は少々特別製であり、特に夜であれば、GPS機能などよりもより確実に現在位置を教えてくれる。おかげでA Rの恩恵のないの山中や郊外での活動にも不自由はないのだが――案外、この眼のおかげで自分でも気付かないうちに土地鑑が鍛えられているのかもしれない。

「ふふふ……もはや監視の名目もなく、この上満足に捜し物もできないようでは、いよいよもってお役御免かもしれないな。いつそネズミらしく、皆に媚びて暮らすのも悪くないか」  
放っておくとどんどんネガのスパイラルに陥りそうな様子に、何か声をかけるべきか迷っている、彼女の胸ポケットから白ネズミが顔を覗かせる。

素早く肩へと駆け上がった白い毛玉は、小さな鼻先を彼女の頬へと擦りつけ、チウチウと鳴く。さつきもずいぶん人に慣れていると思ったけれど、まるで不甲斐ない主人を慰めているかのようだ。

その愛くるしい姿を前に、ぱつとメリーが顔を輝かせる。我が相棒は小さくてもこもこしたものに目がないのだ。

「ねえ！ その子、あなたのペット？」

「あー……うむ。まあ、そんなものだね。大切な相棒だよ。触ってみるかい？」

「いいの？」

メリーが訊ねると、器用に後ろ脚で直立した白ネズミはこくりと首を振る。差し出した指先が、小さな頭に触れると、彼は気持ち良さげに目を細めた。

「わあっ……ご飯とかあげても大丈夫かしら？」

「ん？ ああ、それは構わないが……」

お許しが出るや否や、メリーは先程のベイクドチーズを少し削り、手のひらに載せて子ネズミの前に差し出した。主人のほうをちらりと窺った彼は、特に咎められないことを理解したか、両手でそれを受け取り、一心に齧り始める。

「きゃー♪ 蓮子見て見て、この子すごい可愛いっ」

ぶんぶんと腕を振り回すメリーの感情拡張子が溢れだして視界を埋め尽くした。ちよつとメリーさん、感情制御マグの調整甘すぎやしませんか。

【……伴侶動物かしら？】

【あ……そうね。ご飯とかあげちゃいけなかったのかしら】

【まあ、本人がいいって言ってるなら良いんじゃない？ あんまり指摘するような事じゃないし】

健康者でも伴侶動物を持つことはあるし、自分とは別の人格に短慮や感情的な行動を抑えてもらうというのはそう珍しいものではない。そもそもげっ歯類は遺伝子調整でもしなければ伴侶動物には不向きである。その割にはこの白い毛玉君にはデザインドアニマルとしてのパーソナルタグも保存されている様子が無い。

察するに、素直になるための外部補佐あたりといったところか。その思考は言葉<sup>A R</sup>には出さず、思い浮かべるだけにとどめた。

「本当にこの街は変わってしまったんだな。……昔とは見違えるくらいに綺麗になったが、少々寂しくもある」

白ネズミ君と戯れながら、しみじみとつぶやくその独白は、まるで、本当に遠い昔のこの街を見てきたかのようなだった。どう見ても私より年下の彼女だが——案外そうでもないのだろうか。

【——分からないわよ、案外良いお歳なのかも】

【<sup>Re-livable Experience</sup>回春処理なんてまだ軌道特許の技術でしょ。一般には普及してないと思ったけど】  
科学世紀の現在においては不老化処置はすでに夢の技術ではない。十一歳組に代表される

>Dictionary<

【伴侶動物】

従来のペットと主人の関係に比して、より主人と密接な関係を持つ、生活のパートナーとなる動物の総称。前世紀においては盲導犬、聴導犬などに代表された。科学世紀においては生体電腦でARを経由し主人との感覚リンクを確立し、視覚や聴覚などの補佐を行う動物を主にいう呼ぶ。

>Dictionary<

能力成果主義の徹底と共に、見た目と年齢に統一性がなくなっているのも確かである。

ここ数十年は、京都在住でなくとも教育、生活の利便性から、出生登録に際して電腦化とA R対応処置も施すのが一般化している。そう考えれば、メリーの指摘どおり見た目よりもずっとご年配だというのも外れてはいないのかもしれない。

「しかし、この様では一体これからどうしたものか……」

「よければ私達が案内するわよ。もうここまですれば知り合いみたいなものなんだし」

「良いのかい。折角のお休みのところを邪魔してしまったようだが」

「そんなに遠くでもないし。歩いたってすぐよ」

「あ、……うむ。なんども本当にお世話になる。恩に着るよ」

彼女と子ネズミ、主従は揃ってぺこりと頭を下げる。メリーさんは相変わらず頬に手を当て、可愛い可愛いと目をキラキラ輝かせていた。

「こちらからもお願いしてもいいだろうか。二度も助けられていた上に、申し訳ない」

「気にしない気にしない。ね、メリー？」

「お人好しねえ、蓮子は。このままケーキ食べ放題よりはお財布にも体にも健康的だけど」

「なんだ、メリーも気にしてたんじゃない」

見れば相棒は会計を済ませ、すっかり出かける支度を済ませていた。嫌な顔せず付き合うメリーだって似たようなものだと思う。

「ええと、私は宇佐見蓮子、こっちはメリー」

「自己紹介まで勝手に略さないで。マエリベリィよ。マエリベキ・ハーン。呼びづらければメリーでも構わないけど」

<Profile>

<Name>宇佐見蓮子</Name>

<Age>—</Age>

<Education>私立鹿鳴館大学大学院</Education>

<Class>超統一物理学二年</Class>

</Profile>

<Profile>

<Name>Myrevrie Hearn</Name>

<Education>私立鹿鳴館大学大学院</Education>

<Class>相対性心理学二年</Class>

</Profile>

自己紹介とともにPANをオープンして、公開用の身分を示した。  
「そうだね、そうさせて貰うよ、蓮子さんに、メリーさん、私は——」



彼女もそれに倣おうとするが、彼女のPANに表示されるのはゲスト権限に伴う簡易なもの。ARグラスを借りた時の素っ気ない無記名登録がそのままになっていたのだ。

それに気付いたのだろう、彼女はわずかに言い淀んでから、自己紹介をする。

「私は、ナズ。……ナズナ、という」

「ナズちゃん？」

問い返す私に、彼女はなぜか少し面白そうにはにかんだ。次いで、ポケットの白ネズミ君を手のひらの上に乗せて、

「この子はアル。アルジャノンだ。まあ、こっちも好きに呼んでもらって構わないよ。よろしく頼む」

「ええ、こちらこそ」

「よろしくね、ナズナちゃん、アルちゃん」

かくして。科学世紀の京都に出会った私達三人（と一匹）は、しっかりと握手を交わしたのだった。

■■■ Friday, November 4, 2065 at 13:07 ▼

「このへんかしら」

「ほほう」

大通りの公共複合体で紙媒体の地図を手に入れ、三人揃って北へと15分。もはや一般的な観光地となった寺町通からさらに一本路地を抜けた先。人通りもまばらな細い街路に、ひっそりと身を寄せ合うようにして、古びた建物が軒先を並べていた。

事前知識がなければただの民家と通り過ぎてしまいそうな通りの壁を注意深く眺めれば、色褪せた木目に薄墨で【←萬買取致し<sup>よろず</sup>■<sup>マス</sup>】の木札が店の場所を知らせている。

曇りガラス戸、陽に焼けた窓サッシ、雨風を浴びた板壁。一帯の街並みは、二〇世紀から移築したみたいなレトロな色合い。広告抑制マグも徹底していて、AR対応も最低限しか施されていない。試しにフィルタを外してみると、ポップする広告ウィンドウは錆びたブリキのレトロスタイル。表示にノイズが混じっているのはタグの整備不全のためか。

ここまで徹底していると、クラシカル・スタイルで価値を賦与する演出のなのかもしれない

>Advertisement<

【！】

広告の登録はありません。

<Advertisement<

いが、だとしたらこの汚れ具合、経年劣化はどれだけコストを掛ければ実現できるものとも知れず、結局はどちらなのか判然としない。

「ひとまず到着したわけだけど。ナズちゃんの探し物って、いったいどういうものなのか聞いてもいいかしら？」

「うむ。……なんというか、簡単に言うのは難しいんだが、ある方から預かっている宝塔なんだ。形はランプあたりを想像してもらうのが一番相応しいような気がするが——」

ゼスチャーを交えて外見を説明しようとするナズちゃんだが、いまいち要領を得ない。メリーが共有したPANから仮想タブレットツールを起動する。

「すまない。こう、こんな感じの……」

ツールをPAN経由で受け取って、しばし思案の後にペンを走らせるナズちゃん。しばしの後に描き出されたのは、▲●■を縦に並べた非常に前衛的なデザインだった。

「……おでん？」

「ううう……察してくれ、こういうのは苦手なんだ」

肩を落とすナズちゃんに、白ネズミくんが励ますようにチウと鳴く。

「でもさ、さつきから聞いてるとなんだか当てがあるみたいな感じだけど？」

迷っている割に妙に目的地はつきりしている。まるでこのあたりに探し物がある事を確信しているような口ぶりだった。尋ねる私に、ナズちゃんは胸元から青い色をしたペンダントを取り出してみせる。

△Stridor

【毘沙門天像の宝塔】

京都市教王護国寺・国宝・毘沙門天像が左手に持つている宝塔。木製、高さ十五センチ。一九六八年九月、開催中の「東寺秋の秘法展」に出品中に盗難に遭い、以来所在が不明である。

△Stridor

「ああ、それは簡単だ。私の特技だね」

ナズちゃんは地図を手の上に広げ、そこに首から外したペンダントを垂らした。しやらりと鎖が涼やかな音を立て、細長い八面体の結晶の先端が地図の上を示す。

<Correction>

<error><pendant></error>

<truth>振子</truth>

</Correction>

印刷したばかりのインクの匂いが残る紙媒体の地図の上、垂らしたペンデュラムの尖った先端が、規則的な動きで左右に振れ始める。

「――へえ。ダウジングね」

「蓮子、知ってるの?」

「大昔は割とメジャーなオカルト技能だったのよ」

人間の脳には、本人も自覚できない微細な環境の変化を捉えているという。精密機器でも検知できない電磁波の変化や残留痕跡をもとに、脳は無意識下でそれらの情報を処理しており、その結果が『虫の報せ』や『第六感』として現れるのだという。ダウジングはそれらの情報を、振り子の動きを介して能動的に拾い上げる技術であるとされる。

<Dictionary>

【ダウジング】

遠隔地から特定の物体や人物の場所を捜し出す能力・行為の総称。前世紀末にはその特性の解明が進み実用可能とされ、地下工事における走査や、犯罪捜査などにも使用された。

</Dictionary>

「離れたところから知らないものを見つけられるの？ 凄いいじゃない」

「それが、そんな単純なことでもなくてね」

実用されていたということもあって、ダウジングへの注目度は高かった。原理を解明しようという動きが起きたのは自然の成り行きであつたろう。しかし、そこでダウジングへの評価は一変してしまう。検証の結果、多くの『自称能力者』が示した結果が、事前のフィールドワークや、他者の手によってヒントを示されたりという仕込みが介在したインチキであることが暴かれてしまったのだ。

これによってダウジングは一気に世間の信用を失った。多くの例の中には、検証実験に耐えて真価を見せた『本物』も、少数ながら存在しなかったわけではない。しかしその実践には特殊な才能、生まれ持った脳神経の発達が必須であることが判明し、議論は収束する。

【要するに、私達の眼と同じようなものだったのよ。汎用的な技術には再現不可能な、言わば畸形の能力ってこと】

科学世紀において、技術は誰にも利用可能であるからこそ価値を持ち、その進歩によって人類を未来へと推し進めるものと定義される。先天性の異能を必要とするダウジングは次代のパラダイムたりえるものではなかったのだ。

地図の上でペンデュラムを慎重に走査しつつ、ナズちゃんは難しい顔をする。

「間違はなくこの辺りにある、と思うんだが——」

困惑の理由は傍目にも分かった。振り子の触れ具合が微妙に不規則で、一定しない。ある

程度の範囲は把握できるが、そこから目標を絞りこめないようだ。

「どうにも調子が出ないな。いよいよ私もお払い箱か」

「違うと思うわ。たぶん、別に理由があるのよ」

肩を落とすナズちゃんに、この街についての説明をする。

前世紀末に頻発した大洪水と地震——《大神災》はこの国に大きな爪痕をもたらした。

あの悲劇を繰り返さぬよう、いかなる人的・霊的・自然災害にも屈しない、新たな首都を求める声は、世論となつて大きく政治を動かした。

かくして神亀の遷都は計画され、かつての古都、京都は全天風水に基づいて都市の再編を行い、地下の霊脈調整に万全を期して盤石な守りを得たのである。当時の行政府主導による徹底ぶりは凄まじく、空に二十を超える衛星を打ち上げて星辰を揃えることにまでに及んだといわれている。

拡張現実やIZnetといった設備は、その都市管理の恩恵という一面もあるのだ。

「これは私の仮説だけど、ダウジングって地脈とか気脈の流れを感知する技術なのよね？ それらにアクセスしているなら、結界を含めた京都の地勢がそれを邪魔しているんじゃないかしら」

「……ふむ。だとすると厄介だな。はつきり在処さえ分かればすぐに済む話なのだが」

「この辺にあるのは確かなんでしょ？ だったら一軒一軒見風潰しで探していけばいいだけのことよ」

△Dictionary△

△MORR△

【大神災】

△MORR△

△Dictionary△

△Notice△

【一】

あなたのセキユリティクリ  
アランスにおいて、その情報  
へのアクセスは禁止されて  
います。ご了承ください。

△Notice△

「非効率的ねえ」

「どんなに科学が進歩しても、最後にものを言うのは積み上げてきた努力よ、メリー。さっき検索したリスト回すから、手分けしてぱつとやっちゃいませよ」

物理屋らしく実証主義の格言を口にし、先頭に立って歩き始めたまでは良かったのだが。

「……あれ？」

「行き止まり、ね」

自信満々で道案内をかつて出た私の目の前。前世紀から営業をしているはずの古物商があるはずの座標には、朽ちかけた建物と苔生した小さな祠がぼつんと残されるのみ。

私達の探索行は、リストの一軒目からいきなり文字通りの壁にぶち当たっていた。

可愛らしい顔のお地藏さんの前で頭をかきつつ、複合体を呼び出して地図と見比べる。間違いない。座標上は、間違いなくここだ。

「おつかしいなあー」

「これじゃナズちゃんの事言えないわよ、蓮子」

「ぐつ……ま、間違いは誰にでもあるわよ。次行きましょう、次！」

のんびりと言うメリーの言葉が胸に突き刺さる。決まりが悪いのを誤魔化しつつ、今度は慎重にA Rと地図を見比べながら辻を折れ、路地を曲がり――

「ふむ。見る限り、ただの民家のようなだが」

「あれえー!？」

四つ角を抜け、赤い屋根の駄菓子屋を目印に路地を曲がれば、目の前には四階建てのマンションが道をふさいでいた。ナズちゃんとメリーの生ぬるい視線を背中に感じながら、眉を寄せながら地図を睨みつけることしばし。

「……分かったことがあるわ、メリー隊員、ナズ隊員」

「なにかしら、蓮子隊長」

「このへん、座標タグの管理が行き届いてないみたい。ほら見て、最新の更新が二十年前とかになってるのよ」

「もっと早く気付いてほしかったわね」

解析ツールを開いて指差す私の前でメリーが溜息。いくらA Rが座標を確認しようと、その情報自体が古ければ信用度は落ちる。改めてタグの状況を調べてみれば、地図の状況と実際の町並みは大きくずれているようだった。

「蓮子……」

「ま、まあ、誰にもあることのようにだし、そう気を落とさなくても良いのじゃないかな。ほら、アルもそう言っているよ」

「う、うううう……」

ナズちゃんどころかその肩上のアルくんにまで励まされ、もはや私の立場なんてあったものじゃない。自信などどつくズタボロであった、道の片隅に座りこむ私を、代わる代わるに励ましてくれる二人の視線があまりにも痛い。



それから無謀なチャレンジを続けてみたものの、行っても行っても行き止まり、道の間違ひ、反対方向。ようやくリストに載っている店を見つけたと思えば閉店していたり、とつくに移転した後という有様が続く。中には経路案内がまるまる間違っているものもあり、探索は難航を極めた。

結局、任せると買つて出た道案内はほぼ役に立たず、ナズちゃんの探し物はずっとも原始的かつ非効率に、あちこちを歩き回つては、目に付いたそれらしき店を片端から訪ねるといふ、実に地味で体力勝負の作業となつてしまった。

目的の宝塔に関する手掛かりはゼロ。これまで自信を持っていた自分の土地勘を疑わざるを得ないという事実には、私は内心でだいぶ落ち込んでいた。

「はあーあ……」

「見つからないわねえ」

「これで、大体それっぽいところは回つた気がするけど……」

徐々に傾き始めたお日様の中、メリーが吐息とともにハンカチで汗をぬぐう。

私達は寺町通へと戻り、ベンチに腰掛けて疲れた足を休めていた。近くの自販機で買ってきたジュースに口を付けながら、大きく溜息。

「ごめんね、ナズちゃん。なんか全然役に立てなかったわ」

「いや、付き合つて貰えただけでも大助かりだったよ。一人ではとても全部は回り切れなかったと思う」

発酵乳飲料をアルくと分けあうナズちゃんに、申し訳ない気分を噛み締めていると、通りの向こうから聞き覚えのあるエンジン音。

環境カスタムした古めかしい**ウラル・サイドカー**がベンチの前に停車する。

「ん、なんだお前ら、こんなところで」

運転席に跨ったライダーが白いヘルメットを取ると、その下から左右に括られた金髪がこぼれ出す。青い線の入ったハーフパンツに青のカラー。錨の装飾をアレンジした白帽子も合わせて水兵服にしか（クラシック・アキバスタイルのセーラー服ではなく、文字通りの水兵服だ）見えない私服をトレードマークにしている彼女こそ、

「北白河——」

「おう、ちゆりちゃんだぜ」

答えた少女は、にかつと白い歯を覗かせた。

<Profile>

<Name>北白河ちゆり</Name>

<Age>15</Age>

<Education>私立鹿鳴館大学大学院</Education>

<Post>比較物理学・岡崎研究室助手</Post>

</Profile>

<Dictionary>

【ウラル・サイドカー】

第二次世界大戦時の独軍軍用車をコピーしたロシアMZ社製サイドカー。およそ80年に渡って同じクラシカルなデザインを踏襲し続けており、民間生産ながら実質的に軍用車両と同等の設計を保持する。

</Dictionary>

公開プロフィールに表示される資格はまたいくつか増えていた。大学でも有名人のひとりである彼女を評する言葉は沢山あるが、なによりも重要なのはたった一言で済む。

つまり——あの岡崎夢美教授の助手。

「宇佐見にマエリベリイ。また今日もサボりか？」

「今日は休講です。単位なら大体取り終わってるし」

「そりやそうか。優秀だからな、お前らは」

言って自分で馬鹿笑い。外見と同様、ちゆりちゃんの口調はとても最高学府に居るものとは思えないが、能力至上主義に基づく学習カリキュラムの柔軟性とともに就学年齢の画一化が失われ、強い『個性』がもてはやされる時代となつて、彼女のような例は増えていた。その観点からすれば、十一歳入学組の私もメリーも似たようなものかもしれない。

もつとも、ちゆりちゃんとは私が入学するよりも以前——岡崎教授がまだ準教授だったころからずっと自称15歳のまま、もう5年近くもその助手をしているわけで、年齢不詳にも程がある気もする。

「ふうむ……」

何か気になるのか、ナズちゃんはオープンされたちゆりちゃんのPANと顔をまじまじと覗き込んでいた。

【どうかしたの？】

言葉では聞き辛く、秘匿メッセージを投げてみるが……

【……いや、知り合いに似ていた気がするんだが、他人の空似だな】

納得している様子ではないけれど、それ以上拘るつもりはないらしい。そのまま黙ってしまったナズちゃんは気になったが、まずはちゆりちゃんに訊ねてみる。

「ちゆりちゃんはこうしてここに？」

「ごしゅ……こほん。敬愛すべき岡崎夢美教授のご命令で東奔西走だぜ。国際通信で叩き起こされて、今すぐ機材用意しろってわがまま言われてな。XT6800なんて、いまさら何に使うつもりなんだか」

「それは……大変ね」

「だろ？ 無茶言うよなあマジで」

世代遅れ——というよりも、もはや動力が蒸気なんじゃないかという骨董品のレベルの、家庭用コンピュータ黎明期の機種である。

「……次の発表、ジョン・タイターとか出てくるのかしら」

「教授ならやりかねんな。あんなもんじゃないまどき博物館にだつて残つてないと思うんだが、それならアキバで発掘品探せときた。いくらヒロシゲで往復2時間だからって日帰りとか人使い荒すぎると思わないか？」

参った参ったと、ハンドルに身体をもたれさせるちゆりちゃん。見ればサイドカーには古めかしい電子製品がぎっしりと押し込められていた。

>Dictionary<

【XT6800】

1987年発売の第二世代パーソナルコンピュータ。販売戦略の齟齬によりシェア占有率は低く留まったものの、OSが公開され、ハードソフト両面でユーザーコミュニティ主導による拡張パッチの配布などが活発に行われた特徴を持つ。以上の経緯により根強い人気を残す。

>Dictionary<

>Dictionary<

【アキバ】

アキハバラジャンクヤード。旧都東京に残るかつての一大地気街。《大神災》による地殻変動で陥没した一帯には、保存状態の良いレトロマシンが多く埋没しているため、旧時代の電子基板を求めて発掘を続けるトレジャ―ハンターが集つ。

>Dictionary<

中古を扱うような店であっても、少し気の利いた店なら電子タグ登録してネットスフィアにも広告をうつのが一般的だが、既にそこは多くのユーザーによって、枯れた金鉱の砂金を攫うように調査済みだ。案の定、目当ては過去三十年分のログを遡っても1件もヒットせず、ちゆりちゃんはずかな望みをかけて、古道具屋巡りに勤しんでいるのだという。

「つーかなあ、もう別口で海外の好事家と交渉終わってて、来月になれば状態の良いマシンが届くんだけだな。その前にどーしてももう一台欲しいって言われても困るんだぜ」

上司の下で割と苦労しているのはどこも同じか。ナズちゃんが何故だか深く共感できるとばかりにうんうん頷いている。

「我らが敬愛する教授様が明後日には上海から戻るから、その前に用意してないとどやされちまうってわけだ。んで、お前らは？　なんだか見ない顔もいるじゃないか」

「私達も探しのよ。……そうだちゆりちゃん、こういうの知らない？」  
先程のナズちゃんの画像を公開メッセージで示す。

「……なんだこりゃ？」

「宝塔？　っていうのらしいわ。大事なものなんだそうだけど」

「――美術品ねえ……工芸品って感じじゃないな。東山……違うな、伏見のほうは探してみたか？」

「あんなところにお店あるの？」

「案外残ってるぜ。寺社街は保護条例が厳しいからな。改築しないまま古い店舗が結構残っ

てるぜ。表向きには登録してないところも多いが、骨董好きのじいさんばあさんは意外に立ち寄るもんだ。零番街も近いしな」

かの九龍城めいた魔窟の名前を上げ、指を折るちゆりちゃん。旧体制を色濃く残す、複雑怪奇な結果と違法に増築の繰り返されるあの地域なら、確かにまっとうなものでなくとも手に入るかもしれない。

「で、そのあたりなら——って、なんだこんな時に」

会話を遮るように呼び出し音。複合体を起動させ、ちゆりちゃんはげ、と顔をしかめて通信を繋ぐ。たちまちポップする苺模様の赤いウインドウ。

「何だごしゅ——教授。こっちは今探し回って——は？ 出町柳の名曲喫茶？」

個人間のメッセージのやり取りなら秘匿回線を使えば良いような気がするが、ちゆりちゃんはPANを広げたまま音声通話で話し始める。会話の調子から見るとまず間違いなく相手は岡崎教授だろう。流石に会話内容にはセキュリティが掛っていた。

「なんだってそんな所に……っ！ か教授、いまだこから掛けてきて……はあ？ 赤神財閥の協力？ ちょっとまで、今夜ってそんな、無茶だぜ。私にも都合つてもんだがな……あー、わかったわかった、わかったぜ。すぐ行く。了解だぜ」

跳ねる赤いウインドウに詰め寄られ、ちゆりちゃんは耳を塞ぎながらぼやいた。こちらに向けて片手だけで詫びを示す。

「と言う訳ですまん宇佐見、マエリベリイ、急用ができた」

>Dictionary<

【零番街】

東九条零番街。《大神》からの復興に伴う海外資本の流入と、自己の帰属意識による緩やかなナシヨナリズムによる排他意識を要因として伏見の西に形成された区画。遷都に伴って移築が計画されたが頓挫し、外陣番地となっている。

>Dictionary<

「大変ねえ」

サイドカーのエンジンを掛け、器用に車体をターンさせるちゅりちゃん。

またな、と言いつ残して去ってゆく彼女の背中をしばし見送る、ナズちゃんはぽつりと感想を漏らした。

「なかなか急がしい御仁だね」

「うちの大学の名物よ」

「なるほど」

世界の岡崎研究室の名に恥じぬ、『個性』の持ち主である事は、ナズちゃんにも同意してもらえたらしかった。

「さて、どうする？　せっかくの手掛かりなんだし、伏見まで回ってみるのもいいかもしれないけど。ナズちゃんのダウジングを疑うつもりはないんだけどさ」

「いや。異論はないよ」

「賛成ー。でもちよつと休みたいわ」

「それは同感だね」

他に選択肢もないし無難だろう。生憎と私達はちゅりちゃんのような足を持っている訳ではない。

「蓮子なら車とか似合いそうだけどね」

「維持費だけでどれだけかかると思ってるのよ。駐車場だって馬鹿にならないし」

車自体は昔よりも安価になったが、科学世紀の——特に京都では『行動、進路、速度を一元的に管理されず、運転手の自由意思に依存する動機械』は使用を制限される傾向にある。

私も一応免許は持っているが、個人で交通手段を保有しているだけでも年間かなりの税金やあれこれの保障など、様々な維持費を課せられることになる。その上普段の生活では景観条例などもあつて使う機会もなかなかない。精々が郊外への遠出くらいだ。

「学生の身分で贅沢ってことじゃないかしらねえ」

そうした事情を背景にして、トラム他の公共交通機関が整備されている側面もあるので、一概に文句ばかりも言えない。実のところ、東京にいたころは無許可でそこらじゅう乗り回していたりしたのだが、その辺の話は今関係ないので記憶の底に沈めておく。

そんなことを話しながら、寺町通を下って河原町に出た時だった。

「東西、東西!!」  
トサイ トサイ

張り上げられた大声と共に、どおん、と大きな太鼓の音が耳を震わせる。

電子加工されていない、生の音声。魂を震わす始原のビート。おなかの底からびりびりと震えるような打音が街中をこだまする。

ツイートクラウドを溢れさせ、何事かと野次馬達が振り向く中、通りはなおも激しい太鼓の音が響き渡る。

騒ぎの中心は四条の交差点だ。色鮮やかな衣装を頭からすっぽりとかぶり、揃いの白い仮面をかぶって個性を消した奇妙な格好の一団が、通りの真ん中に集まって、道を占拠してい



たのだ。

「東西、東西!!」

「東西、東西!!」

厚底の靴を履いて、色とりどりの髪に安全ピンやケーブル、LAN端子やら体中にこてこてとくつつけた。パンクなファッションの一团が、仮面を震わせて妙な祈念を繰り返す。

太鼓に続き、鈴が鳴り銅鑼が打ち鳴らされる。琵琶に琴が激しく弦をかき鳴らしてそこに加わり、笛と喇叭が一斉に吹き鳴らされた。奇妙な節回しで祈祷の文句を唱和しながら、彼等は路上に広がってゆく。

仮面の集団を割るようにして、中央から一人の男が進み出る。

「凱旋せよ、凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

此度は宴、百と八十年ぶりの大回帰なるぞ!!

いざや進めや、我ら天狗の大躍進! 彼方の山より降り来て、舞えや踊れや京の空に! 今宵は宴、歓喜の夜! 哀れ伴天連の世は潰え、幻想は御座に即位せん!

出でや参れや妖どもよ、我等の夜に馳せ参じよ! 此度は回帰、回帰の時!

凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

先頭の仮面の祈念に、その他大勢が追隨する。楽器をかき鳴らしながら、一团はゆつくり

と行進を始めていた。右へ、左へ、斜めに踏みだし後ろに下がるその歩き方は、古い時代の道術の歩法を模したものだ。

ナズちゃんがフードの上から耳を押さえ、顔をしかめて呻く。

「なんだい、この馬鹿騒ぎは」

「……無秩序で無軌道な若者の青春の暴走、ね」

**天狗党分派・鞍馬会。** 電脳処置忌避者の自然団体が、妖怪を信奉するオカルトサークルと結びついて生まれた京都独自のオカルトセクトである。

彼らの主張は超常現象を世界から消えかけている幻想、妖怪たちの警鐘であるとするもので、結界暴きが違法化された原因の一端でもある。まっとうなオカルトサークルからは冷たい目で見られている一方、先鋭化する反A R運動と協調関係を持ち、地下では繋がっている非合法団体も少なくない。

「ヴァーチャルへの傾倒を忌避してリアルへの回帰を叫ぶ文化は東京じゃ珍しくもないけど、こっちだと絶対数が圧倒的に少ないから——その分主張も先鋭化してるのよね」

以前はこのように、公園や道を占拠してのパフォーマンスが主体だったが、最近では反電脳主義を標榜し、公共複合体の破壊、トラムの中継点を閉鎖したりという活動を大っぴらに始めたことで社会問題となり、立派に危険思想団体の仲間入りをしていた。

もともと、こうやって自己主張激しい格好をして氣勢を上げ街を練り歩き、たまに喧嘩沙汰を起こしたりするだけで、一般人には十分に迷惑なのだけでも。

## >Dictionary<

### 【天狗党】

A R対応や電脳化を拒否し（※、あるいは後天的に処置を無効化して人間の多数への帰属を否定する若者たちの総称。何者でもない特別な存在の自分を叫ぶことをその主張とする。本拠地は京都、大阪、東京など。）  
（※）電脳化を拒否することは違法ではないが、一般にはあらゆる恩恵を拒否することで社会制度からの逸脱に繋がるため、近代情報化都市では特別の理由がない限り倫理にもとる行為とされる。

</Dictionary>

&lt;Anonymus&gt;

【匿名】プライバシーの保護のため、映像を遮断します【匿名】

&lt;/Anonymus&gt;

彼等の顔を覆う仮面には一律に【匿名】の画像表示。PANの強制無効化処置によって顔を消し、正体を隠して運動に参加しているのである。学生や会社員でも思慮なく運動に参加しやすい一因であるのに加えて、犯罪歴のある人間が混じる温床ともなっており、当局は取り締まりに手を焼いているとか。

【おい、早く通してくれ！】【また天狗党】【勘弁してくれよ、今からバイトなんだって】【なにやってるんだか知らないけど邪魔！】【え、暴動？ どこどこ？】【詳細希望】【早く誰か通報しろよ】【迷惑かけんな、よそでやれ！】【これが本物なのか。実に興味深いねえ】【さっきからうるさい！】【横から失礼します。彼等にも一理あるのでは？ そもそも……】【議論はよそでやれ】【あいつらは非法法団体。味方する連中は全員犯罪者。はい論破！】【行政府仕事しろよ……】【またあいつら？ いい加減にしてよ本当】【やべえ、超クールじゃん】【検非違使局マダー？】【通報しました】

トラムの駅を占拠し、進行を妨害して練り歩く彼等に、そこら中から非難の声が上がり始める。膨らむツイートクラウドは密度を増し、牧羊犬の処理も間に合わない。大量のツイー

トに埋められて、ARにも遅延がはじめていた。

**検非違使局**もすでに到着しているらしいが、京都有数の繁華街にして新京極も近い大通り、

時刻は夕方とあって観光客も多い。混乱が収まらないのは無理もない。

「しかし参ったわね。トラム使えないじゃない」

「迷惑ねえ。オカルト活動は結構だけど、もつとひっそりやつてもらえないかしら」

諦めと共に、一つ先の乗降場へと道を迂回しようとした時だ。

「おや」

最初に空を見上げたのはナズちゃんだった。手のひらを上に向け、ぽつりと告げる。

「……雨か」

確認するよりも早く、地面に雫が染みを作りはじめた。肩にいた白ネズミのアルくんが慌ててナズちゃんの胸元に潜り込む。

「え、なに、雨!? ウソでしょ!？」

「ちよつと待てよ、雨なんて聞いてないぞ!!」

それまでの晴天が嘘のように一転、空はモザイク状に曇天へと変貌した。降り注ぐ雫はあつという間にその数と勢いを増し、豪雨へと変わる。滝のような雨が河原町の舗装された地面へと叩き付けられ、アスファルトを水浸しにした。

公開通信に、天気関連のツイートが爆発するように膨らんだ。ただでさえ混乱で情報の密塞していた河原町に、さらに雪崩れ込んだ混信が重なり、処理が限界を迎えて帯域制限が発

<Dictionary>

【検非違使局】

首都・京都内陣の治安を取り締まる令外官。独立した操作件、逮捕権を保有し、その性格から県警とは対立している。

</Dictionary>

<Notice>

【一】

河原町を中心に情報密度の過剰な情報を感知。システム維持のため帯域制限を行いました。これに伴い現在一部通信機能が繋がりにくくなっています。ご了承ください。

</Notice>

生ずる。叩き付ける雨にARの仮想ウィンドウが情報強度を削られ、ぱりんぱりと割れ砕けては、地面へと押し流されていった。

あまりにも突然に崩れだした空模様には、露店や観光客も大騒ぎ。鞍馬会の見物をしていた野次馬たちは、われ先にと店の軒下へと避難していく。

<SYSTEM>

【-】システムに過剰な負荷を感知しました。帯域制限を行います。【-】

</SYSTEM>

同時に鞍馬会の行列は歓喜の叫びを上げ、狂ったように楽器をかき鳴らした。雨で視界がきかない中、道を塞ぐ彼等のせいで喧騒はさらに増してゆく。

「照覧あれ！ 照覧あれ！ 天の恵みやいざ雨や！ 甘露や甘露、天魔魔王尊のお心ぞ！

諸人こぞりて照覧あれ！ これぞまさに、大回帰の証！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

感情拡張子を貼り付けた仮面を空に向け、降り注ぐ雨を甘露のように全身で浴びて。道に広がって叫ぶ彼等に追いやられ、私達は路地の奥へと押し込まれる私達。

たかが雨くらいでと言うなかれ。科学世紀の京都において、晴雨は自然の範疇のものでは

ない。天候制御技術はマクロカオス理論の発展とともに発展し、気候や降雨、温湿度変化は区画単位までほぼ把握、制御されている。

台風や季節外れの豪雪を緩和し、未然に防ぐことを目的としているこれらの技術により、雨や晴れはあらかじめ指定された時間に割り振られ、事前の通知を外れる事はまずありえないのだ。

「ひああ……」

「メリー、大丈夫？」

というわけで、雨は文字通りの寝耳に水。大急ぎで非難したにもかかわらず、ブラウスは肩まで水浸し。歩き回って暑いので上着を脱いでいたのが仇になった。メリーからタオルを受け取り、布地に押し当てて少しでも水気を減らす。

あつという間に人通りの少なくなつた（一部連中を除いて）通りの端、千代紙メールを扱うお店の軒差を借りて空を見上げる。

「ついてないわ。今時京都で濡れ鼠なんて……」

「——ふむ。なかなか難儀なものだね」

ナズちゃんとは言えば、用意周到に取り出した雨傘を広げ、雨を凌ぎながら地面の水たまりを避け、悠々と歩いてくる。

「この街も、良いことばかりではないということかな」

「反論できないわ」

>Dictionary<

【天候制御】

《大神災》への教訓から開発された都市規模の天候制御システム。京都では五星级酒店によって開発された「雨伯」「風伯」「雷公」らの制御モジュールが十二年前から稼働している。これらは内陣の天候を一元管理し、予定の日には雪や雨を降らせ観光にも一役買っている。

>Dictionary<

>Dictionary<

【雨傘】

天候制御により、内陣においては実用品としての雨具、日除けの装具は不要とされ、現在ではもっぱら好事家の扱っ（叩）つてゐる。

>Dictionary<

メリーさんは言わずもがな。こちらの生活に慣れ切った私からも、用心のためにいちいち傘を持ち歩く習慣という習慣は抜け落ちていた。上京の時に持ち込んだ折りたたみ傘も、旅行の時でもなければすっかりクロゼットの奥で埃を被っている。

一方で、先程にもましてやかましいのは、鞍馬会の連中である。この天気雨こそまさに科学が無視を続けてきた怪異たちの顕現であり、警鐘だと歓喜に沸き立ち、手がつけれないレベルでハッスルしはじめていた。

「照覧あれ！ 照覧あれよ皆々様方！ 京の空は我らのものぞ！！

いざ、凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

「東西、東西！！」

「東西、東西！！」

停車したトラムの上に乗って駆け昇って、雨を浴び声張り上げて騒ぐ始末。混乱は極致を極め、收拾は付きそうにない。検非違使局も逃げまどう人たちの誘導で手いっぱいであるらしく、鎮まるまでには相当の時間を要するだろう。

予定外の豪雨とこの混乱でトラムが一時的に閉鎖され、動きが取れなくなったことが行政区の公開通信のツイートに流れてきた。

「天候制御のコントロールミス？ そんな事あるものなのかしら……」

ネットニュースを覗きこんで、メリーがふうむと首を傾げる。京都で暮らし始めて結構経つけれど、こんな話聞いた覚えがない。なおも続く通りのバカ騒ぎと、一向に弱まりそうにない雨足を見上げ、私は大きく溜息をついた。

△Notice▽

【！】

急激な降雨により、安全のため左京区のトラムを一時停止します。お急ぎの方は最寄りの地下鉄駅などをご利用ください。

▽Notice▽



■■■ Friday, November 4, 2065 at 21:02 ▼

結局。あのまま2時間が過ぎても雨足の衰える様子はなく、私達は雨宿りの場所を求めて先斗町へと場所を移していた。鴨川と高瀬川の流れに挟まれた一角、華やかな明かりが真夜中まで灯り続ける飲み屋街の喧騒も、降り続く雨のせいでもどこかぼんやりと霞んでいる。

ちゆりちゃんに教わった伏見の骨董屋街は、神社前という立地もあって、午後五時も過ぎればほとんどが店を閉めてしまう。まさか一軒一軒、閉まった扉を叩いて回る訳にも行かず、なし崩し的に今日の活動は打ち切りとなったのであった。

「まだ止まないわねえ」

窓の外に吹き付ける雨雫を眺め、メリーが吐息。雨は特に左京区の陣内で強いようで、なかなか弱まる様子もない。窓の外で無数の違法スパムがポップしては、風雨に吹き飛ばされて消滅するのを繰り返していた。

既に入店して三時間近く過ぎており、そろそろ店を出るか、少なくとも河岸を変えるくらい事はしないといけない。

「ごめんねマスター、長居しちゃって」

「気にしなくてもいいよ、どうせこの雨じゃあお客も来ないだろうし」

カウンターでコップを磨きながら、四角い顔のマスターが苦笑する。

誰もいないよりは、定期的にグラスを重ねる私達がいる方がまだマシと言うことだろう。

実際、ここを出たところで行き先の当てがないのは確かである。

こう言うとき多くの知人友人に怪訝な顔をされて非常に心外なのだが、京都じゅうのウワバミの集まる先斗町でも、秘封倶楽部行きつけの店はさして多くはない。

ここ『<sup>シニトラ</sup>左』はその少ない例外の一つ。前世紀の映画に出てくるような内装の、レトロなバーで、A Rも最低限に抑えられている。カウンターには映画から抜け出してきたような風格のマスターが独りで立ち、お店を切り盛りしていた。お世辞にも繁盛しているとはいえない、私達以外の客も滅多にいない。だからこそ私達もそれに甘えて常連になってしまっているのだけだ。

実際、このお店自体がマスターの憧れで始めたものであるらしく、趣味と実益を兼ね備えた（実益に関しては本当に備えているのかは議論の余地があるかもしれないが）だけあってそのキャラ作りは徹底していた。悲しいかな私達の知識や興味のほうが追い付いていないというのが目下の問題である。

……いや、決してマスターの努力をないがしろにしてるわけではなく、学生の身分としてはさほど高額ではない価格で美味しいお酒が飲めればそれで十分なのであって。

【言い訳はみつともないわよ、蓮子】

【ごもっとも】

秘匿通信によるメリーのツツコミに領き、グラスを傾けた。

猫も杓子も電脳化がスタンダードの科学世紀であるからこそ、電脳処置のないウェットなお酒も好まれる。ARの成分表とそれにまつわる健康被害、年齢確認や飲用の弊害を表記され、いちいち健康管理ソフトに承諾のサインをしない限り飲めないというシステムは飲兵衛たちにとって大変不評であり、マスターが責任を持って個別にそれらを確認し、認証してくれるこのお店は本当にありがたいものだ。

「この分だと、明日まで止まないかしらね」

「どうなってるのかなあ。異常気象なんてもうとくに死語になってると思ってたけど」

頼杖について簡易複合体を弄る。夕方から京都を襲った大雨は、天候制御モジュールがエラーを起こしたものであると説明され、復旧に全力を挙げていることが行政府から発表されていた。昨今なかった天候の変化は、交通機関への乱れとしてニュースの時事欄にぎわしてはいたが、以後大きな進展は見られない。

「知った事か、そんなの！」

呂律の回らない叫び声。ナズちゃんは5杯めのカクテルを空け、空のグラスをだんとテーブルに置く。カウンターで薄めた葡萄ジュースをちびちび飲んでいたアルくんが、その剣幕に驚いて飛び上がった。

主の様子に首を傾げた白ネズミはチウチウと鳴いて主人を窘めようとするが、ナズちゃんはそんなアルくんをうるさいなと座った目で睨み付け、グラスを大きく掲げて叫んだ。

「マスター、もう一杯!」

言いながらも、ナズちゃんの体はふらふらと左右に揺れ動く。

「……まったく! だいたいだね、いつも、いつも、勝手なんだよ! 人に相談もせずにも全部一人で決めて、ひとりで、抱え込もうとしてばかり! そんなところまで聖に似なくてもいいじゃないか! ……私が、その陰で、どれだけ苦労しているのかも知らないで、気にするな、だって? 放っておけるわけないだろう、馬鹿トラめ! そうだ、一度、私の苦労も思い知ればいいんだ!! ……マスター、おかわりだ!!」

A R グラス越しにもわかる、完全に据わった目の赤ら顔のナズちゃん。お酒は嫌いではないようだけど、あまりアルコールに強いとは言えず、一杯、二杯と飲み進めるうち、いつしかタガが外れたように度数の高いグラスをばかばかと開けていた。

「マスター、聞こえなかったかい、……おかわりだ!」

商人らしくもなく、そろそろやめておいたらどうかというマスターの心遣いも吹き飛ばさんばかりに、ナズちゃんはがあーっと牙をむく。止めるべき役目を背負ったアルくんですらも、主の剣幕に怯えてグラスの影に逃げ込んでしまう。

「すごい大トラねえ」

飲んでるアルコールの分量だけなら我々のほうが全然上なのだが、出来上がった酔っ払

いは一匹だけである。

「トラは私じゃない、あっちのほうだ!!」

どうもナズちゃんの言葉の端々にのぼる、トラというのがナズちゃんの上司らしい。愛称なのか何なのか。

「お待たせ。これで最後だよ?」

マスターがナズちゃんの前のグラスを交換する。さりげなくウイंकと共に、アルコールを抜いてくれたことが秘匿通信で私達に知らされた。やるなマスター、男前。

ナズちゃんは気付かずに、カクテルのグラスをぐいとあおる。

「まったく。馬鹿トラめ、人の気も知らないでいい気なものだよ。……どうせ気付いてないんだろ。無理せず休めなんて……勝手なことばかり……! 私が、ただのお役目で尽くしてるとでも思ってるのだろうか。……ああまったく、鈍感にもほどがある! 惚れた弱みでもなきや、誰が好きこのんでこんな厄介なこと引き受けるもんか!」

【……わーお】

酔ったナズちゃんの愚痴——あるいは惚気。思わずメリーと顔を見合わせる。

【ねえねえ、いまの聞きました? メリーさん】

【ええ、もちろん聞きましたわ。蓮子さん】

突然転がりだした告白に、見て見ぬ振りをすべきだという理性と、ちよつとそこそこ詳しく、という興味が葛藤を始める。上司と部下の禁断のオフィスラブ——というには少々年

齡が違う気もするけれど。それとも教師と教え子とかならうか？ 固唾を飲んで見守る私達をよそに、ナズちゃんはひつくと肩を震わせしやっくりを一つ。

「……別に、貴方のための探し物なんて、苦でもなんでもないさ……。私が貴方のためにできる事なんて、そう多くないんだ。小心者の粋がりでだなんてことだつて百も承知しているよ。……賢将だと賢しらにしてみたところで、私はしよせん一介のネズミなんだ。務まるのは中身の伴わない皮肉屋がいいところだろう。……ああ、そうさ、分かてる。貴方ができないことなんて、ほとんどないんだつて、ことくらい……それでも……あなたの、そばに、居たいんだつてことくらい、分かってくれても……いいじゃないか……っ」

呂律の回らない独白と共に、ナズちゃんの首がこくりこくりと揺れ始める。

「本気……人の気持ち……ごしゅ……」

結局、新しいグラスを半分も空けないうちにナズちゃんはテーブルに突つ伏して寝息を立て始めた。僅かに目元が赤い気がするのは、乙女として見ないふりをしておくべきか。

「……ばか……星……」

寝言を漏らすナズちゃんに、マスターが近づいて様子を見る。

医療触媒があれば、過剰なアルコールはすぐに分解されて無害になるが、おそらくナズちゃんにはそれが無いだろう。幸いにして、彼女は酔い潰れたというよりも、張り詰めていた気が緩んだだけだった。不安そうにしていたアルくんも、事情を理解したか彼女の胸ポケットに潜り込んでゆく。

「……やれやれ。大変そうだねえ」

「ありがとうマスター。ごめんね、色々」

「気にしないでいいよ。それより、蓮子ちゃん達はどうするの？ なにか、新しいのでも出そうか？」

「そうねえ」

ナズちゃんの肩に毛布をかけてやりながらマスターが聞いてくる。

壁掛け時計のアンティークな文字盤を見て確認。時刻はそろそろ九時半を回る。普段ならもう一軒くらい回っても良い時間だけど、ナズちゃんを放ってこのまま二人で再度乾杯、というのはちよつと気が引ける。メリーも同感のようだった

「ねえ蓮子。明日もナズちゃんの宝探し付き合うのよね？」

「まあね。ここで見捨ててさよならってのは、ちよつと、これを見ちゃうとねえ」

わずかに目元を濡らし、寝息を立てているナズちゃんを見て、吐息。すっかり絆されているのは私も同じだった。

しかしそうなると問題になのは今日の寝床だ。

ナズちゃんは見たとこ泊まるところを用意しているようにも思えず、それらの事を聞きだすには酔っ払いはあまりあてにならない。

と言って、まさか朝までここに居座る訳にも行かないだろう。マスターならそれくらいの事を言い出しかねないが、せつかくのお氣に入りの居心地のいい店であるからこそ、あまり

好意に甘え過ぎて迷惑をかけたくない。メリーとの相談の結果、このまま勘定をすませて店を出ることにした。

そろそろカードの限度額が怪しくなってきたいて、メリーに奢ってもらったのはご愛敬。

「……気をつけてね」

引き留めようとするマスターにお礼を言つて、借りたお店の傘を広げる。

「とりあえず、ナズちゃんは今夜は私のところで引き取るわ。後で説明しておく。ほつぱりだしておく訳にも行かないし、一応、酔いつぶしちゃったわけだしね」

「もう一人寝るところあるの？ 蓮子の部屋」

「五月蠅いわね。それくらい気は使つてゐるわよ」

一応、これでも自覚はあるのだ。

メリーに答えてナズちゃんを背負おうとしたところでA Rが着信を告げる。

「ん？」

思考トリガーが反応、ちゆりちゃんからの秘匿通信がポップする。同時に、夕方から今まで私宛にいくつか着信があったことの通知もあった。

サスペンドしていた簡易複合体を起動し、A Rと接続。水兵服にカスタマイズされた二頭身のアバターがポップした。雨のせいか少々接続が悪い。仮想ウィンドウにもわずかにノイズが混じっていた。

【どうしたの？】



【ああ、やつと繋がった。何か知らんがやけに接続が悪いな】

【ちよっと飲んだのよ】

大分待たせてしまったはずだが、ちゆりちゃんは気を悪くした風でもなく、あつさりそうかと領いた。飲み屋街などでは、意図的に外部との通信を繋がりにくくしている場所がある。マスターがそうしているというのは聞いたことがなかったが、あり得ない話ではない。

プライバシーと情報管理の二律背反、ああ、矛盾なりしは人間なり。

【宇佐見、マエリベリイ、どうだ、どうせこの雨じやのんびりできてないんじゃないか？ 研究室で飲み直そうぜ】

【……はい？】

思わぬお誘いの言葉に、メリーにもPANを通じて通信の共有を許可。一緒に会話に加わってもらう。ちゆりちゃんのアバターふあポケットを探り、私達へ研究室へのゲストアカウントを配布。

【いやな、さつきまで駆け回ってたんだが、気付いたらこんな時間だろ？ この天気じゃどこも早じまいだろうし、お前らも飲み足りてないんじゃないかと思つてな。どうせ払いは教授だから、適当に見繕つてきてくれればタダ酒だぜ？】

【……本音はそれね】

バレたか、と舌を出すちゆりちゃん。

【うーん……正直、少し飲み足りないけど】

【行くの？】

メリーさんは少し不満そうだった。私と同じ一人暮らしながら割と貞淑な彼女、無断で（誰にだろうか）外泊はもつての他などと思っている模様。

気が向いたらでいいさ、と控えめな追伸<sup>ポストスク립ト</sup>を残して、ちゆりちゃんからの通話は切れた。残された私とメリーは顔を見合わせる。

「どうする？　なんとなくだけど、このままじゃ物足りない気がするのよね」

「呆れたわね。ナズちゃんもいるのに」

「いいのよ？　別に無理して付き合ってくれなくても」

「そう言ういい方するの、ずるいと思うわ。蓮子」

くすりと笑ったメリーは大学への経路を検索し始める。私はコートを羽織り、ナズちゃんをそつと背負い直した。

■■■ Friday, November 4, 2065 at 22:19 ▼

かくして。

ようやく運転再開したトラムと地下鉄を乗り継ぎ、やってきました衣笠山の麓。古来より山麓に名刹古宮を頂く、北峯に連なる学舎、我らが私立鹿鳴館大学。

岡崎研究室のある旧校舎は、普段私達が入入りにしているキャンパスとは2ブロックほど離れた区画に、まるで遺跡のようにひっそりと佇んでいる。

「よ」

4階建ての校舎の一階で、ちょうどいま戻ってきたらしいちゆりちゃんと出くわした。この雨の中ついさつきまでサイドカーで駆けまわっていたらしく、全身ずぶ濡れの身体をタオルで拭いている。上着は脱いで適当に椅子に引っかけ、おっぱいが丸見えというのにも気にしていないワイルドさだ。

雨具も付けずにご苦労な——と言いたいところだけど、どういう訳かむしろずぶ濡れの割にかえって元気になっているようにも見える。

「大変だったみたいね」

「大変なんでもんじゃないかなったぜ。降られるわ道塞がれるわで散々だ。……じゃ、行くか」  
着替え終えたちゆりちゃんは、防水シートでぐるぐる巻きにした大きな荷物をひよいと担ぎあげた。例の骨董品PCだとしたら結構な重さのはずだが、意に介した様子もない。

ちゆりちゃんに続いて奥の階段を昇る。校舎の中、廊下や教室の設備は片っ端から解体され、用途のわからないアンテナや計器がずらっと、望郷の宇宙人のように天を向いて手を広げていた。一説では教授が個人で打ち上げた衛星とやり取りする通信域を確保するためのものだというが、真偽は定かではない。

利用者も少ないこの校舎は、ほとんどが岡崎研究室の機材に占領されている。一見して何が何だか分からないガラクタだが、説明を聞いてもやっぱり訳のわからないガラクタばかりだ。一応掃除はしてあるようで、埃は目立っていないかった。

廊下を占領する機材を踏み越えた3階廊下の突き当たりに、両開きの分厚いドアが威容を放っていた。

<Epigram>

Abandon all despair, ye who enter here  
【汝等！／＼に入るもの一切の絶望を捨てよ】

</Epigram>

悪趣味な文字でドアの上に記されるのは、なんとも強欲な一節である。教授らしいと、メリーと小さく笑い合う。

「ごしゅ……こほん。教授ー？」

ざいと手動でドアを押しあげれば、煙を吐くフラスコに蓄音器の駆動音とリアクターの唸り声。無造作に積み上げられた紙媒体の論文メディア、一世紀以上も昔の磁気記録媒体。果ては、初等科5年生向けの科学教材までが節操無くそこに放置されている。

学内においても魔窟と呼ばれる岡崎研究室だが、それは比喩でもなんでもなく、文字通り踏み入る事を躊躇わせるほどの雑多なガラクタの山がそこかしこに鎮座していた。

中でも悪趣味の極めつけは壁に掲げられた一枚の油絵だ。色褪せた額縁の奥で、火を吐くドラゴンと対峙する騎士の姿が、この部屋の主を象徴している。

「教授、いねーのかー？」

「んあー」

やる気のない返事とともに、積み上げられた論文メディアの山の陰から、ほこほこと湯気を立ち上らせる赤い頭が覗く。見事にバスローブまで真っ赤だった。

どういうこたわりか、岡崎教授はひたすらに赤一色を好む。学内はおるか公の場でも、とても正気の沙汰とは思えない赤のローブとマントを愛用し、常用品の大半も赤一色。好きな花はチューリップ、好物は苺という徹底ぶり。

『夢幻伝説』岡崎夢美。一般には孤高を愛すると解釈されているが、実際はちよつとその



個性が強すぎて、誰も追従できないと言うのが正しい。比較物理畑の出身だが、すでに大統一理論すら解明したと豪語し、その完全性を破る例外の力、魔法にすら言及して物議を醸した。かの朝倉理香子をして、5世紀先を行く科学理論と言わしめた非統一魔法世界論であるが、現在のところ、岡崎教授その人と助手だけが支持するトンデモ学派である。

その変人ぶり学会からもそっぽを向かれていながら、世界各地を飛び回って研究に勤しむ彼女は、教授職をクビになることもなく、どの勢力に属する事もない奔放さで学界に居座り続けていた。常人には扱いかねるその奔放さゆえ、学内ではすっかり腫れ物扱い。研究室は敷地の隅のへき地、旧館の端へと追いやられている。空調も壊れがちで雨漏りも修理されないオンボロ施設なのは、大学運営側からの精一杯の反発であろう。

「教授。先に居たんなら出迎えくらいしてくれても良いと思うぜ？ もう少し健気な助手をいたわってくれても罰は当たらないんじゃないか？」

「何言ってるの。さっきこっち戻ってきたばかりなのよ。シャワーくらいゆつくり浴びさせなさい、ちゆり」

満足げに濡れた髪をタオルで拭う教授に、ちゆりちゃんは不満を露わにしながら抱えている荷物を降ろす。

「呑気なもんだな。こっちは雨の中駆けずり回ってたつのに」

「あら、もしかしてそれ、もう見つけてきてくれたの？」

「出張から戻るまでに探して来いって真夜中に叩き起こしたのは誰なんだぜ……」

## △Otonari△

### 【岡崎夢美】

比較物理学。K大名誉教授のち私立鹿鳴館大学岡崎研究室。光子と光波の操作に関するエネルギー偏差の研究にてER3システムより表彰を受け、弱冠15歳で首都の最高学府の教授職に付いた才媛。学閥には属さず在野の研究者とも交流を持つこともなく独自のスタンスで研究を続ける。非統一魔法世界論可能性世界モデルの提唱者。  
△Dictionary△

防水フィルムのかかった荷物に目を輝かせる教授に対し、ちゆりちゃんはげつそりと呻くばかりだった。まったくもって報われない。

「それより、なんでこんな早く帰ってきたんだぜ。またなんかやらかしたのかよ」

「失敬な。ちゃんと仕事よ。あつちで直に緊急の呼び出し食らつてさ。《戯言の蒼》のエラー対応って、じかに機械語まで読まされてさ。マジで死にそうだったんだから……」

げんなりした表情で告げる間にも、教授のもとには次々とメールがポップする。教授の城たるこの研究室では意に沿わない部外者は電子的にも物理的にも締め出されるようになっていくらしいが、それを掻い潜ってくるとなると、相手も相当のものなのだろうか。

「あーもうなによ、せっかく一息つけると思ってたのに……はい岡崎。玖渚？ なによ、私今帰ってきたところで——は？ 《チーム》の再招集？ 軋岸に綾南も？ なにそれ」

丸聞こえの通信にポップするのはアバターなしの【玖】一文字。見間違えでなければ西日本に絶大な影響力を誇る大財閥、玖渚機関の独自回線ではなからうか。

「は？ それ本気で言ってるの？ ……悪いけど今日はパス。さつきまで大陸にいたのよ？ そんなのアンタのお守に任せて……って、ああもう、わかったわかった。そんな泣きそうな声しないの。あとでそっち行くから」

仮想ウィンドウを乱暴に叩き割り、何をぬかしてるのかしらね玖渚の奴、と愚痴をこぼしつつ通話を切る教授。どうやらちゆりちゃんがいつも公開通信で会話するのは教授ゆずらしい。そう言えば教授の出身地は京都ではなかったというのを思い出した。

<dictionary>

【玖渚機関】

日本における財閥家系の最上モデルでもある巨大複合企業体の背景存在。本部は兵庫県南東部の3市を占め、関連・傘下企業総数は2万7千を超える。現在の機関長は玖渚良。

</dictionary>

「……はあ。何でも私に言えば済むと思わないで欲しいわ。同じ赤色だからって哀川と一緒にされてもねえ」

「なんでもかんでも首突っ込んでる教授の自業自得だぜ」

「数合わせに名前貸してるだけよ。新欧州連合<sup>EU</sup>との交渉済ませたら抜けるつもりだったの」どさりとソファに足を投げ出し、汗ばんだうなじをタオルで拭う。何気ないしぐさがいちいちどきりとするほど魅力的だ。よく考えてみれば、かの岡崎夢美教授の風呂上がりなんて、一部の男子学生には垂涎のシチュエーションかもしれない。

ともあれ、いつまでも入口に突っ立っているわけにもいかない。挨拶と共に中に入る。

「教授、お邪魔します」

「お邪魔します」

「来たわね不良学生ども。今日も夜遊びとは感心しないわね。特に宇佐見、レポートほったり出していい度胸じゃない」

「おかげさまで。教授こそ、魔法研究の成果は？」

「すこぶる順調よ。可能性空間移動船の建造も目途が立ったわ」

ひらひらと、小さなタブレット端末を示して微笑む教授。組み上げられたばかりのアブリが動いていたが、あれを船と言い張るつもりなのか。どこからどこまで本気なのかは分からないけれど、この奇矯な性格が時に強く人々を魅了するのも確かなのである。

国内の評価は散々だが、海外には彼女の熱心な信奉者もいるとのこと。先年、園山朱音を

>Dictionary>

【新欧州連合】

New European Union。21

世紀初頭、度重なる経済不安を背景に、旧EU加盟国の中から強い欧州を再提唱されて結成された地域統合体。旧連合加盟国のうち技術、財政の柱となっていた国家のみが参加を許されるという指標に非加盟国から非難が相次ぎ、パリ動乱の原因となった。

>Dictionary>



欠いたER3システムが世界最高の頭脳《七愚人》の後継に招聘したなどと言う荒唐無稽な噂がまことしやかに語られたのも、あながち無根拠なことではないのかもしれない。

「で、その子は？」

「今日知り合った子なんだけど——」

寝息を立てるナズちゃんを借りたソファに横たえつつ、今日あったことの一通りを教授に説明した。

「で、ちよつと飲み直そうって話になってな」

「なるほど。良きかな良きかな。こういう無茶ができるのも学徒のうちだけね。謳歌したまえ学生諸君」

「教授が言うなよ。永遠の学生気分のかせに」

「あつはつは」

私達とそう変わらない年齢の教授は屈託なく笑う。

かくして、研究室は臨時の宴会場に早変わり。ナズちゃんは部屋の奥のソファ—ベッドに寝かせて、テーブルに積み上げられていた器材や資料を脇に押しやり、ちゆりちゃん、私、メリー、そして教授で、途中のコンビニで仕入れたおつまみに缶チューハイなどを手に手に突き上げる。

「乾杯！ 乾杯！ 乾杯！」

こだまする酒宴の誓い。ぶつかり合う安っぽい合成缶の音もまた、冷え具合を感じさせて

△Dictionary>

【ER3システム】

大統合全一学研究所。米国テキサス州に本部を持つNPO。世界中の頭脳をかき集め、学問の最果てを目指すを標榜する。所属研究者に課される規則は「フライドを持たない、節操を持たない、愛着を持たない、弱音を吐かない」の4つ。

△Dictionary>

△Dictionary>

【七愚人】

ER3システムの頂点にして世界の解答に最も近い7人。空前絶後の頭脳ヒューレット教授を始め、令嬢ラヴ、西東士など錚々たるメンバーが顔を揃える。

△Dictionary>

たまらない。さつきまで呑んでいたものの十分の一近い価格だが、アルコールに貴賤はないのだ。

「くーっ、染みるなあ！ 生きてるって感じがするぜ」

たちまち350 mlを空っぽにし、ちゆりちゃんは空いた缶を放り投げ、机の上で仮想ウィンドウに付きっきりの教授の背中に回り込む。

「んで教授、さつきから何やってんだ」

「ニュース見てないの？ 今日さ、天候制御モジュールに情報テロがあつたじゃない。あれの後始末よ」

真偽も定かではない風説の類と思つていたが、どうやら噂は本当の事らしい。当初、システムバグと疑われたエラーは原因が特定できず、現在外部からの人為的なハッキングまで視野に入れて警戒レベルを上げて全モジュールの総チェック中だという。

良くそんな情報を知っているものだ。さすが教授、情報網も並ではない。

……と思いきや、ちゆりちゃんは渋い顔。

「おいおい、また覗き見かよ」

「法は市民の安全と財産を守るためにあるものよ。ながら食事で死者が続出したら**食事制限**法ができたんだし。史上最悪の悪法って非難轟々だけだよ」

つまりね、と教授は真剣な顔で指を立て、

「生命も財産も失う覚悟完了の私なら法に従ういわれもないってことよ」

<Dictionary>

【食事制限法】

行きすぎたフードファディズム、増加の一途をたどる医療費への改善を目的として施行された医療健康法規。医療触媒の普及推進や京都全市の市民へ健康管理ソフト【ウォッチミー】のインストールを義務付けるなど大胆な対策を行ったが、基づく思想の極端さから各所で反発も招いた。

</Dictionary>

「おいおい」

苦笑と共にツツコミを入れて、ちゆりちゃんはくしゃりと缶を潰す。

「私もニュース見ました。なんか鞍馬会がテロに走ったって噂もあるみたいですけど」

「実行犯がってこと？ ……眉唾ねえ。いくら反ARセクトだからって、電脳化処置なしで天蓋のサーバ群に接触するなんて無謀もいいところよ。そんな技術も度胸もないでしょ、あの連中」

「分かんぜ。丸太町の騒動、ウチのゼミの学生も参加してたんだろ。二名ばかり捕縛されて取り調べ中って聞いたぜ」

「情けないわねえ。幻想信仰なんて、それでも学問の徒かしら。不思議を疑い怪異に立ち向かう志なくして、研究者に明日はないのよ」

教授は研究室の壁に掲げられた、古めかしい油絵を見上げて言う。  
「ドラゴン殺し。」

それが岡崎研究室の掲げる理念だ。荒唐無稽と笑われようが、愚かな行いと笑われようが、今日の不可能を明日の可能にするため邁進する、古めかしい研究者達のシンボル。この油絵はその象徴であるという。

「いい？ 悪魔殺しの特効薬に、銀の銃弾なんてもいはないわ。私達の行く手を阻む不可能の怪物——見れず、触れず、声も聞こえないドラゴンを滅ぼすのは、いつだって人間のもつ疑う力なのよ」

それはまさに、教授が身を持って実践していることでもあった。岡崎教授の提唱する非統一魔法世界理論が、愚にもつかない妄想と世界中の学会からそっぽを向かれている中、本人はまるでどこ吹く風と研究に邁進している。

「……また始まったぜ」

いつものお題目を一席ぶちあげ始めた教授に、ちゆりちゃんはグラスを握らせ、まあやこしい話はあとにしようぜと、近くのブランドーを掴んで注ぎこんでゆく。

私の隣で桃の果実酒をこくこくと飲んでいたメリーは、しばし手を止め、壁の油絵をじつと見つめてしばし。ふと顔を上げ、私の袖を引く。

「……ねえ、もしかして今日私達が迷ったのってそのせいじゃないの？」

「え？」

「A Rの異常よ。ナズちゃんは不案内だったからってことで説明できるけど、いくら知らない道だからって、普通に考えて私達まで何時間も道に迷うなんてこと、あるものかしら」

「……そりゃそうだけど」

言われてみればその通りだ。私も昨日今日、京都で暮らし始めたわけではないのだ。いくらなんでも、地図片手にいつまで経っても目的地に辿りつけないのはおかしい。アルコールの入った頭でもそれは論理的な指摘に思えた。

「タグの更新がされてなかったわけだし、データが古かったってことじゃないの？」

「それもおかしいのよ。古いお店が潰れて、そこがマンションに建て替えられたって情報が

更新されてなかったのなら分かるわ。でも、もっと古い祠や石壁に変わるなんて変じゃない？  
ARの情報があんなに広い範囲で、何年も更新されてないなんて、もっと騒ぎになってもおかしくないはずだわ」

「……確かに、そうね」

「もしも。ARに異常があつて、目に見える光景と、地図が、同じように間違つてたら？ 私達にそれを確かめるすべはあるのかしら？ 行き止まりをそうでないと見せかけたり、古い記録映像を表示させたり、曲がり角を増やされたりすれば、道に迷うのも道理だわ」

幻想と現実を等価に見るメリーならではの視点だった。いくら来たことのない道だつて、いちいち壁に触れながら突き当たりに隠し扉があるかなんて確かめることはしない。塀や建物の壁が見えていれば、そこに入る事はないはずだ。

「ちよつと待つてメリー、それつて今日の騒ぎが人為的だつたつてことよ？」

ARはあくまでAR、『拡張』現実でしかない。私達は生命維持ポッドに収納され、仮想世界の京都に暮らしているわけではないのだ。

全天対応拡張現実といえど、確かに実在している京都という町に、生体コンタクトレンズと電腦を介して、ささやかな描画レイヤーを現実を重ねているにすぎない。五感を誤魔化すなんてことは不可能で、別の現実を体験させるには遠く及ばない。メリーの言うようなヴァーチャルを再現する事はできないはずだ。

それに、ARは表示を抑制できる。極論、電腦を落としていれば、通信自体ができなくな

るはずだ。

「……いや。在りうるかもだぜ。可能性の話だけだな」

私の疑問に割り込んで、ちゆりちゃんが焼き鳥の串を啜えてつぶやく。

「A Rへの認識に関しちや宇佐見のほうが正しい。けどな、二次元の絵だつて陰影や光沢、パスを弄れば、三次元に錯覚させて人間の感覚は騙せるんだ。いくら優れた機能だつて、最終的に頭ん中に入ってきた情報进行处理するのは、脳だからな」

額をトントンと指でつつきながら、ちゆりちゃん。まだ信じられず、私は教授にも話を振ってみる。

「教授、そんなこと出来るものなの？」

「結論から言えば可能ね。……リアルタイムで錯視を起こすとなれば相当のリソースは要求されるでしょうけど、ヤクモクラウドの処理能力なら実現はできるわ。表示させる方法も、現実的な範囲で存在してる」

A Rにおいて電子タグに関連付けられた情報は、その重要度、専門性に応じてカテゴリー・クラス分けされる。どんな情報も等価に扱っていは限られたリソースが死んでしまうし、何より身内の訃報と昨日出たばかりの新作スイーツの情報が等価では不便極まりない。スパムフィルタなどはこの情報の重みや特性を判別して、不要なものを除外するものである。

電脳を落としておくことはできるが、それは電源を引っこ抜いてOFFに出来ているのと訳が違う。脳の一部を間借りしている電脳は、完全な停止状態というものがありえない。

## <Dictionary>

### 【ヤクモクラウド】

神話の須賀宮建国を語源にする、京都を管理する大規模電脳モジュール群の総称。リソースの主は多重構造結界《八重垣》の維持に用いられるが、霊脈調整や衛星軌道計算他、全天候制御やA R処理、I Z n e tの管理も担当している。モジュールの大半がクラウドサーバ上の仮想エミュレイターに存在するという、極めて特殊な管理をされている。

</Dictionary>

あくまで休眠状態<sup>サスペンデッド</sup>なので、緊急情報や災害避難など、生命や安全にかかわる重要情報はそれに優先して表示されるように調整されている。

では、その時に実際とは違う地図と壁や曲がり角のARが、視界に表示されれば？

「隠し通路にあり得ない行き止まり。京都市街の拡張現実迷路の完成ってわけだ」

「待って。それ、かなり有用な情報よ。……そうね、確かに疑似二次元の情報を、閲覧者の状態や座標に応じてリアルタイムで描画するなんて無茶をしたなら、モジュールに処理限界が来るのもあり得る話だわ。そもそもあのモジュールが真つ当な外部介入くらいで負荷を感じるはずがないし。ってことは、タグのデータが古かったのも、データの異常に対して働いたバックアップがそこまでロールバックしてたから……？」

そこまでを口にして教授はたと黙り込んだ。口元でコマンドを実行。え込んだ後、やおら宙空を振り仰いで口頭でコマンドを実行。

【留琴！ 現在の処理を全て中断！ クラウドの処理タスクを一から洗い直して！ ウェブカムの履歴も全部！】

【はいー】

かわいらしい返事と共に、古式ゆかしきクラシカル・アキバスタイル・メイドの格好をしたアバターがポップした。《留琴》と呼ばれた彼女は、運んでいた荷物を放り出し、立て掛けていた箸を手にして処理を開始する。

のんびりとした動作だが、彼女の実体は鹿鳴館大学のサーバに棲む岡崎研究室謹製の高度

知性AIである。並の複合体など問題にならない横断処理を可能にする業務用情報フィルタによって、教授の手元にみるみる情報が集積されてゆく。

「ビンゴ。お手柄よ三人とも」

論理タイピングで数十枚の仮想ウィンドウを次々に処理しながら、教授が会心の笑みを浮かべた。

「盲点だったわ。ARを日常の感覚としている人間には、非実体と実体の境界が曖昧になっている。それが前提じゃなきゃいけなかったのよ。タグ情報の重みづけだつてタグ自体の固有情報じゃなく、ネットスフィア上の暗号鍵生成に依存してるわ。データとの紐付が無茶苦茶になれば、AR処置をされた人間にはそれが強制的に視界に割り込むことになる……！」  
獐猛な笑顔を剥き出しに、マルチタスクで何事かの処理を始めてしまう教授に、取り残された私達はチューハイを片手に顔を見合わせる。

「……教授、飲まないのかー？」

「それどころじゃな——」

その瞬間。

ちゆりちゃんに応えようとした教授の言葉を遮るように。ずん、と凄まじい衝撃が京都を揺るがした。

視界がぶれ、体が奇妙な浮遊感に包まれた。背筋を直接掴まれて、思い切り上に引っ張り上げられるような——胃がひっくり返り、上下左右までも怪しくなるような不快な感覚。衝



撃よりもその違和感に、思わず口元を押さえた。

「——なんだッ!?」

皆の中でいち早く動いたのはちゆりちゃんだった。ソファを蹴立てて立ち上がり、手近な窓へと走り寄る。押し開かれた窓の向こうから、生温い風が水滴を伴って室内に吹き込み、散らかり放題の紙媒体を吹き飛ばす。

嵐はなお激しさを増していた。夜空には渦巻く黒雲が分厚く立ち込め、うねりを上げて吹き荒れている。時折、そこから漏れだす閃光が夜闇を裂いて煌めき、数秒遅れてはお腹の底に響くような重低音で、どろどろと雷鳴が鳴り響く。

「なに、あれ」

窓の外に視線を固定させ、メリーが喉の奥から掠れた声を漏らした。

歴史深き古都、京都の街は平坦だ。時代とともに厳しさを増す景観条例によって高層建築の建造は禁じられ、この大学の四階からでも、遠くを見通すことは容易い。

その升目のような街並みの一角に、異様なものが浮かび上がっていた。

光り輝くフレイムと、その間を繋ぐ後光。鮮やかな閃光が描き出すのは、幾重にも重なってきらびやかに立ち上がる朱屋根の瓦。精緻な細工を施された虹梁。迫り出す木鼻、それらを取り巻く高欄。

遙か昔に失われた、かつての京都の伽藍風景。それが夜空の上に突如出現し、煌々と輝いている。

「……………」

光り輝く巨大な伽藍の所在は、京都の中心部となる御所の森上空。嵐の中なおまばゆくきらめいて、ゆっくりと回転を続ける威容の前に、その場の全員が言葉を失っていた。

「ねえ、あそこ！ ……何かいない？」  
同時。

「——！！」

鳥とも、獣とも——判別の付かない、甲高い悲鳴のような声が、空を震わせた。

<SYSTEM>

<ERROR>

【！】システムに過剰な負荷を感知しました。

緊急事態につき——Znetを遮断します。【！】

</ERROR>

</SYSTEM>

跳ね上がった警告メッセージが視界を赤く埋める。夜空に見えていたいくつかのAR表示が次々に割れ砕け、ノイズを撒き散らした。

分厚い曇天をなお厚く覆い尽くさんと、空に湧き起こる黒雲に無数のノイズが走り、あたり一帯のA Rのウィンドウが明滅する。業と吹きつける風と共に、空に閃光が迸る。

落雷の衝撃とともに、轟音が京都の夜を貫いた。過剰電流がA Rを圧迫し、数百万ボルトの電圧差がネットスフィアを駆け巡る。雷跡を追うようにぱりぱりと音を立て、意味不明の文字を並べたスパムウィンドウが次々に捲れあがっては割れ砕けてゆく。

情報偏差が安全装置を超過し、通信バーストを起こしたのだ。

「A Rが……？」

とつさにフィルタを外せば、京都全市に混乱を伝える無数のツイートクラウドが膨らみ、爆発的な勢いで拡散を始めていた。

【なんだ今の音!!】【雷落ちなかった?】【御所のほつで騒ぎとか】【詳細希望!!】【停電起きてない?】【当方K大にて立ち往生中! 救助もとむ】【拡散希望! 御所にて暴動!】【トラムの再開まだー?】【緊急・空に怪物】【悲報・徹夜して書いてたレポートが焼失した件について】【お前ら天気予報見る?】【降水確率が異常値】【A Rが動かない】【I z n e t落ちてない?】【公開通信混雑しすぎ】【詳細希望】【鞍馬会のテロ】【四条通で火災発生】

風雨に交じって、緊急車両のサイレンが鳴り響く。遠く立ち昇る煙はなにかの爆発だろうか。行政府が緊急回線でクラウドサーバのシャットダウンを知らせるメッセージを連発し、混乱に一層の拍車をかけていく。

明らかな異常事態が、京都を襲っていることはや誰の目にも明らかだった。

SYSTEMA

【一】

システムに異常が発生しました。I z n e tを強制終了します。

SYSTEMA

SYSTEMA

再起動中……そのまましばらくお待ちください。

SYSTEMA

息を飲む私達の中、早々と立ち直ったのはやはりこの人、岡崎夢美。

【留琴!!】

【はあい】

ポップしたアバターの電子音声が暢気な返事を返す。管理者権限を付与された人工知能は、鮮やかな高速処理で京都市で同時多発的に起きている異状事態の情報を集めてくる。

その結果は――

「『八重垣』にハッキング？ 天候制御モジュールに再異常、I N n e t断線……って、オモイカネブレインにまで損傷出てるの!？」

ヤクモクラウドのうち、全天天候制御を行うプログラムが、ネットスフィアを巻き込んで停止、制御不能とも言える状態になっているという事実が判明し、教授は顔色を変える。

うねる黒雲を駆け巡り、再び天を割いた稲光が、京都の中央を打ち据えた。

立て続けの轟音が大気を揺らし、赤枠で彩られた緊急メッセージが視界にオーバーレイして跳ね上がる。やかましい警告のサイレンを撒き散らすウインドウは、京都市民の安全を訴え、外出を控えるように叫んでいた。

「落雷なんて……もう10年も起きてなかったのに」

「天候モジュールの異常って、制御なんて精々雨の量の調整くらいだろ？ ここまで無茶苦茶な干渉できるのかよ」

「理論上はね。人工降雨技術程度なら一世紀前に完成してるもの。コストを無視していいな

>SYSTEMA  
再起動中……そのまましばらくお待ちください。  
</SYSTEMA>

>SYSTEMA  
再起動中……そのまましばらくお待ちください。  
</SYSTEMA>

ら、落雷も暴風も実現できるわ。それにしちや高度に制御され過ぎてる気はするけど」

「何の騒ぎだい……」

目を擦りながら、ソファから這い出すナズちゃん。まだ酔いが抜けきっていないのだろう、顔に張り付いたタオルを払いのけ、ぼんやりとした顔で体を起こす。

「むぎゅっ」

と、ソファをつかみ損ねて彼女はそのまま床に倒れこんだ。思い切り顔から床にぶつかった鼻をさすりながら、涙ぐむ

「ナズちゃん、平気？」

「痛たた……ん……な、なんとか、ね。お陰で酔いもさめた。ずいぶん騒がしいが、一体何が起きて——」

眼を回したアルくんを拾い上げ、衝撃でずれた知性眼鏡を直しながら、ナズちゃんはやれやれと身を起こし——窓の外を見て言葉を失う。

そこに再び強烈な閃光。轟いた落雷に合わせ、さらに変化は起きた。

△Extra news△

【天狗じゃー！ 天狗の仕業じゃ!!】

▽Extra news▽

△SYSTEM△

【1】システムに異常が発生しました。I-Z netを強制終了します。

▽SYSTEM▽

「きゃ!？」

突如、仮想メッセージウィンドウが、目の前に叩きつけられるようにポップ。ARに強引に割り込んできたのは優先レベルは最大の、緊急告知メッセージ。

レトロな古新聞を模したような紙面には、奇妙奇天烈な【号外】の見出しが次々に躍る。

△Extra news△

【御山にて御一新以来の大会議!! 迫る四天王の帰還に議論踊る!!】

【大天狗総選挙告示!! 犬走、姫海棠両派の動向やいかに!?】

【雲海の中に巨人の影!! 河童の新技術か!?】

【竜神様の出現!! 百八十年目の大回帰いよいよ不可避か!?】

【紅魔条約ついに締結! 月領を割譲と発表したその真意とは!?】

▽Extra news▽

フィルタを素通しで跳ね回るメッセージは、上空から京都全体に広がっていた。

雨交じりの風の中、荒唐無稽を飾り立て、煽りたてるような記事が視界を埋めてゆく。

黒雲の中、雷鳴と暴風はおさまらず、空はいっしか鮮やかな紫色。ARの異常は天の伽藍

屋根を中心にしてなお激しさを増してゆく。

閃く雷光に照らされるたび、京都の市街は鮮やかに艶やかに姿を変える。きらびやかな朱

と金銀に塗られた街並みに、人ならざる者たちの喧騒が響く。

鬼がいた。天狗がいた。河童がいた。狐がいた。狸がいた。猫がいた。

路地を所狭しと妖精たちが駆け回り、ビルの麓に幽霊が輪を作って、吸血鬼が魔女とともに空を飛ぶ。

暴走を始めた拡張現実とは、私達の住む科学世紀の街を、旧き幻想の国へと変貌させていた。

仮面の二団は、派手な衣装に身を包み、太鼓を銅鑼を鼓笛を鳴り響かせて京都の通りを練

システムに異常が発生しました。Internetは停止中です。復旧をお待ち下さい。

</SYSTEM>



り歩いていた。どこにこれだけの数が身を潜めていたのだろう。叫ぶ声は風雨の中にもなお高らかに、朗々と祈念が響きわたる。

<Anonymus>

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

</Anonymus>

無表情な仮面の群れに浮かび上がる【匿名】の文字列。ARの警告ウインドウを顔一面に貼りつけ、無個性のレイヤにその身を包んで、彼等はまるでトランプの国の兵隊たちだ。

<Emotion>

【喜】 【怒】 【哀】 【楽】

</Emotion>

表示エラーを起こした感情拡張子が騒がしく撒き散らされ、人ならざる者たちの宴を風の

京都に描きだす。

自動放送のネットニュースを介して、私は京都の各地で起きている争乱を知る。

路地のそこかしこから這い出してきた化け猫たち声を揃えて鳴き、伏見の鳥居の向こうから狐が踊り、淡路より上陸した狸と合戦を始める。

北の鞍馬山からは修験者姿の天狗の団が高下駄鳴らして行進し、御一新を知らせる札を撒き散らしながら次々と街に舞い降りてゆく。闇の中揺れる鴨川は洪水のように水量を増し、岸に這いあがった河童たちが大相撲の本場所を開催を告げる。

野辺の化野からは死霊に亡霊たちの群れが湧きだした。額の札を揺らして陽気に跳ねるキョンシーを筆頭に、土盛りの墓を崩し、着飾った骸骨達が骨の身体をカラカラと鳴らして陽気に練り歩く。

四条通、新京極には外来の吸血鬼に魔女に悪魔がワイン片手にハロウィンパーティをはじめていた。ジャックランタンの笑い声がこだまする中、桂川のほとりには灯籠を揺らして先触れの鬼火が灯り、琵琶に笛に太鼓に琴に、主なき楽器達が演奏会を始めていた。

南からは地を割って浮上する宝船。宝物を満載した船上では七福神が優雅に歌合わせ。

遠く北東の大江山から地響きを立てて鬼達が進軍し、担いだ酒樽を通りに並べて酒盛りを始め、糺の森からは式紙たちが群れて空に舞い上がる。龍安寺の竹林の道から、兎達の担いだ輿に乗って優雅な十二単を纏う姫君が姿を見せ、空を荘厳なる焰を纏った鳳凰が羽ばたく。まさに神と魔の百鬼夜行。

夜に沈む千年王城の街並みに重ねて、鮮やかに上書きされる魑魅魍魎の宴。拡張現実を彩る幻想の中、彼等は歌い、騒ぎ、踊る。京都の夜は我等のものと。

「東西、東西!!」

「東西、東西!!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

祈念の唱和はなお高らかに、嵐の夜に響き渡る。偽りの科学世紀は終わりを告げ、今宵こそが大回帰の時。我等の求め焦がれた幻想の開闢が始まるのだと、歓喜の中に叫んでいた。

「夢の中みたいね」

メリーのいつも見ている光景は、こんなものなのだろうか。吹き付ける霧雨を顔に感じながらの私の独り言に、メリーはただわずかに微笑むだけで答えない。

御所の上に黒雲と渦巻く風がうねり、白い閃光を伴ってばりばりと雷が鳴り響く。天に浮かぶ光の伽藍はなおその大きさを増し、地上へと迫ってきている。

「……………」

つよい耳鳴りに、知らず、メリーの肩を掴んでいた。また、彼女がどこかに行ってしまうような。そんな想像が頭を離れない。

訳もなく胸の中に湧き起こる恐怖を抑えきれない。手足が震え、指が強張る。

このまま、私達の現実が、この途方もない幻想の夜の中に飲み込まれて消えてしまいそう

にすら思えた。

飲み込み切れない不安を、唇が形作ろうとしたその時。吹き込んだ風と共に冷たい水滴が顔を叩く。

「わ。ふっ」

思わず目を閉じて顔を背ける。びようと部屋に吹きこむ雨風が、時代遅れの紙媒体メディアを巻き上げた。同時、私の耳にメリーの悲鳴が届く。

「な、ナズちゃん!? どこいくの!?!」

「すまない、蓮子さん、メリーさん。色々と世話になった。——どうやら、私は私の務めを果たさなければならぬようだ」

ナズちゃんの姿は開け放たれた窓の上にあつた。はたらくカーテンの隣、サッシの上に立つて、御所の上に光輝く伽藍を見上げて眼を細める。

肩で、アルくんが言葉を継ぐようにチウチウと鳴く。

「難しいだろうが、やるだけのことはやってみるさ。君たちは安全な所へ避難してくれ」

まさかと思う暇もない。ナズちゃんは躊躇いなく窓枠を蹴って、暗闇の向こうに身を躍らせていた。

こうと雨交じりの風が吹き込み、顔を叩く水滴が視界を埋める。

「ナズちゃんっ!?!」

考えるよりも先に身体が動いていた。嵐の中へ消えようとする小さな背中めがけて、思い

切り手を伸ばす。

が。彼女を掴もうとした手は虚しく空を搔き――

ほんの一瞬。閉じていた目を空けた時には、ナズちゃんの姿はもうそこに無く、夜闇にぽかりと口を空けた窓枠だけが風に揺れていた。乾いた口の中がかすれた音を立てる。

「……ナズ、ちゃん？」

「おいおい。四階だぜ、ここ」

ちゆりちゃんが喉の奥でうめいて、窓へと歩み寄る。私達も慌ててそれに続いた。メリーと顔を見合せながら、ごくりと息を呑んで窓枠に手をかけ、眼下を覗き込む。

が。窓の下、アスファルトの地面には何も見当たらず、風にたわむ街路樹と、雨に揺れる水たまりが広がるのみ。

吹き付ける雨風の中に帽子を押さえて辺りに目を凝らす、気象警報を撒き散らし、避難路を明滅させる街の中にグレーの小さな背中を見つけることはできなかった。

ごうごうと唸る風の中、どうすることもできずに、ただ呆然と嵐の中を見つめる。

「やれやれ……。トラブルはいつも立て続けにやってくるわけね。少しはゆっくりしたかったのになあ」

私達の沈黙を破ったのはそんな一言だった。いつの間にか着替えた馴染みの赤いスーツに赤いマント。エラーを吐き出す仮想ウィンドウをまとめて握りつぶし、席を立つ教授に、ちゆりちゃんが振り返る。

「行くのか、教授？」

「こんな馬鹿げたトラブル、この科学世紀に不世出の天才たる私にしか解決できないってことよ。人気者って辛いわねー」

「こういう時でもなきやお呼びがかからないってことに疑問を持つといいと思うぜ」

「誰もいないから、私だけが活躍できるってことでしょ。あんたも来るのよ、ちゅり」

「へいへい、了解だぜ。……まったく、宮仕えの辛いところだな」

ぺろつと舌を出して、積み上げられた荷物を漁り、ポシエットと大きなリュックに訳の分からない道具を詰め込み始めるちゅりちゃん。

「さて。宇佐見、マエリベリイ。呆けるのはそれくらいにしときなさい」

机の下から馬鹿でかいトラंकを（これもまたご丁寧に真っ赤だった）引っ張り出し、最後に残った仮想ウィンドウの一枚を指ではじいて、教授は赤いマントの肩越しにこちらを振り返る。

「これから私達はこの馬鹿げた騒ぎを止めに行くわけだけど。不思議と秘密を暴くオカルトサークルさんとしては、このあとどうするつもりかしら？」

くすりと口の端に笑みを覗かせ、どこか挑発的に問いかける教授の視線に――  
私達は、一も二もなく頷いていた。

1900 at 00:02

暴走の果てに横転したトラムの脇をすり抜け、紅のモンスターマシンは碁盤目模様の町を駆け抜ける。黒雲渦巻く嵐の中、風よりも速く疾走するのは、岡崎教授の駆るACコブラ。博物館に飾られていてもおかしくない、化石燃料で走る骨董品だ。485馬力のエンジンは自身の出力で車体を軋ませ、最高時速290キロのタイヤ痕を切り付けて疾駆する。

目指すは、天に光の大伽藍を浮かべる京都御所。助手席に押し込められた私は、齒を食いしぼり、シートにしがみついて吹き飛ばされるのを耐えるばかりだ。

【教授、あんま無茶すんな！】

ちゅりちゃんからの公開通信がアバターとともにポップ。

安全運転なんて言ってられる状況じゃないのは分かるけど、停車したトラムや観光リキミヤの間に擦り抜けるように疾走する教授のハンドルさばきは肝が冷えるばかりである。

【何言ってんの、無茶するのはこれからよ！】

しかし、教授は速度超過と道交法違反でポップする警告画面を、緊急事態に基づく特別措置で全部叩き伏せて無視。路上に転がるゴミバケツと、折れた街路樹の間を横滑りに擦り抜けて、赤い稲妻はなおも加速。

教授が流れるような動作でギアを高速に叩きこみ、アクセルを踏み抜かんばかりに押し込めば、足元の獣のようなエンジン音はさらに猛り、ほのかな灯りを灯す京都の街並みをはるか後方へと置き去りにしてゆく。

それだけをみればどこか幻想的な光景。けれど、耳元を吹き付ける風の音に、濡れた地面を擦るタイヤの音に、私の表情は引き攣るばかりであった。

【蓮子、だいじよぶ？】

【だいじよばない……】

論理タイピングすら曖昧で、メリーへの返信もおぼつかない。

コブラもサイドカーも定員は2名ずつ。必然的に私達はそれぞれに分かれて乗り込む事になった訳だけど、今回ばかりはメリーが羨ましくて仕方がなかった。

【ご主人さまー！】

目を回しかけた私の目の前に割り込むアキバスタイル・メイドの二頭身アバター。留琴は箒を後ろ手に、メールのホロを手にててぴょんぴょんと跳ねる。

【ご主人さま、交通局の情報持ってきました】

はめてはめてと笑顔を見せるAIに、ご褒美の【<sup>LIKE</sup>いいね】を連打し、教授はデータを私に





自体もノイズに塗れて途絶する。

「今度はなに!？」

そして、異変は足元から起きた。

これまで大人しく京都の各所の交通情報を表示していた道路の案内板がぐにやりと歪み、無数の矢印になって分裂した。赤青緑の矢印の群れがてんでバラバラに跳ねまわり、でたらめな方向を指して、蛇のようにのたうち始める。

鹿苑寺行きの矢印と烏丸に向かう矢印がぶつかって情熱的に絡まり合い、太秦行きの矢印が力強くぐるぐると渦を巻いて宙に吸い込まれ、神宮行きと伏見行きが手に手を取って南へと駆けだしてゆく。

「っ!？」

鎌首をもたげた祇園行きの矢印が、威嚇音とともに飛びかかってくるのを慌てて振り払い、私は上手く働かないフィルタを精一杯制御した。

【A R……出力……膨大……】

ノイズ混じりに灰色になったちゅりちゃんのアバターが懸命に通話を維持し、両手を上げて叫ぶ。なんとか通信を聞き取ろうと顔を近づけたその瞬間。ウィンドウを透過して、大きな目玉がぬうつと生え出してきた。

「わああッ!？」

突然のことに淑女らしくもない悲鳴を上げてしまう。コブラのフロントを突き抜けるよう

に飛び出したのは、茄子色をした大きな傘だった。そいつは私の目の前で一つ眼の目玉をすうっと細め、大きな口を開けてけらけらと笑う。べろんと伸びた大きな舌が、私達の顔をぬるりと滑り抜けた。

拡張現実による映像だと頭は理解していても、真つ赤な舌が顔に触れた瞬間、私は確かにその生温い温かさと、唾液のぬめりを感じていた。

「——ッ!？」

背筋に怖気が走り、悲鳴が喉の奥に詰まる。強張った手のひらから滑り落ちそうになった通信機を慌てて握り締めた。教授がブレーキを踏み、鋭くハンドルを切った。コブラの車体は地面を迷走する矢印を踏み潰し、路面を横滑りしながらも辛うじて均衡を保つ。

目玉と舌の生えた大きな傘は、上下さかさまになりながら愉快そうにおなかを抱えて笑い、どこかへ消えていった。けたたましい笑い声の残響が、夜の京都に響く。

「な……なっ、なに、いま……っ」

「ただの拡張映像よ。実害はないわ。いよいよ本格的にお出ましね」

教授に言われて周囲を見回せば、古き京都の町並みを彩る、鮮やかな色とりどりの光。掲げられた籌儀が七色に燃え、空を横切る何百の流れ星。ビルの屋上を踏み締めた狼男が月に向かって吠え、鴨川の水面を揺らして人魚が跳びはね、宙にくるんと輪を描く。

コブラはすでに、京都の夜に描かれる幻想の領域へと踏み込んでいたのだ。

「派手なハロウィンパーティーねえ」

ハンドルを握りながら、教授は車体を滑らせ、飛び出してきたカボチャ頭を構わず跳ね飛ばした。くるくると飛んでいった先で、ジャック・オー・ランタンは並ぶ骸骨達にストライクを決め、夜空にぱっと光が散る。

商店街に生えた卒塔婆に墓石の間では、ミイラ男とゾンビが肩を組んでラインダンス。半透明のお化けシャツが真っ赤な口をあけて笑いながら通り過ぎ、キョンシーが一行に並んで前ならえ。

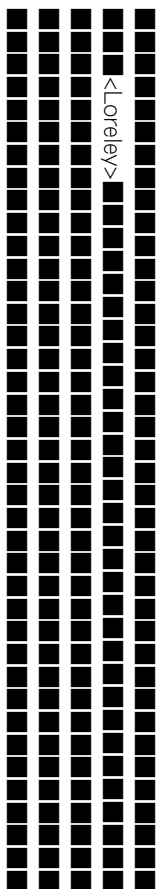
さながら、怪異達の桃源郷。科学世紀の管理都市を照らしていた文明の火は吹き消されんばかりに小さくなり、黄昏の中に浮かび上がるのは、千年を刻む怪異達のみやこだ。遠く、どこから聞こえてくる歌声が、ふと耳を掠める。

——刹那。まったく何の前触れもなく、あらゆる光が一気に消失した。

<SYSTEM>

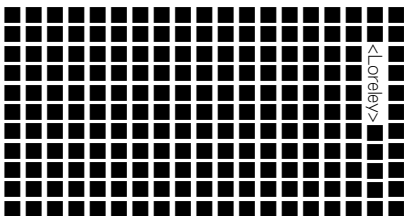
<EROOR>

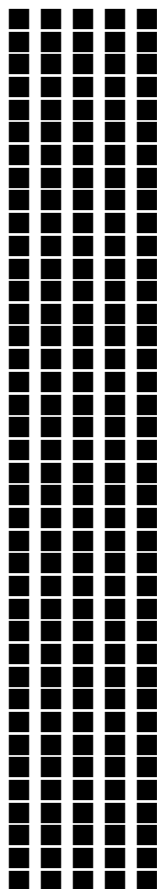
<Loreley>



<SYSTEM>  
<EROOR>

<Loreley>





</EROOR>

</SYSTEM>

視界が闇に覆われる。瞬きをしても何も変わらない、完全無欠の真っ暗闇。反射的に立ち上がりかけた私は額を痛烈にコブラの天井にぶつけ、目の前に散る火花に呻いた。

直後、悲鳴のようなブレーキ音とともに足元から突き上げるような衝撃がきた。

「まずい、宇佐見、運転変わって！」

「っ、あ、え!？」

投げ出されたシートの上、焦りをにじませた教授の声。思い切り肩を掴まれて、私の体は運転席側に引き倒された。胸にシートベルトが食いこんで変な息が漏れる。

「ハンドル！ 早く!!」

そこでようやく私は、教授がコブラの操縦を失っていることに気付く。

背筋に這いあがる冷たさに身を震わせながら、真っ暗闇の中でハンドルを探り当て、なん

とかそこにしがみついた。

「宇佐見、いいからまっすぐ走らせて！」

「無茶言わないでください!!」

タイヤが激しくスピンし、地面を引き裂かんばかりに悲鳴を上げる。が、ごとと車体を擦り蛇行し横滑りするコブラから、投げ出されそうになるのを堪え、歯を食いしばってハンドルを抑え、暴れ回るステアリングを必死に押さえ込んだ。

ハンドリングを私に丸投げし、教授は自由になった手で十枚近い仮想ウィンドウを展開。猛烈な論理タイピングを開始する。

暗闇の中に赤い窓枠が次々に開閉し、コマンドラインの奔流が溢れ出す。管理者権限からの非常割り込みプログラムが、ARと全天管理システムに生じた照度調整のシステムエラーを押し流してゆく。だが、その処理の途中で車体が激しく振動を始めた。

「教授、早く！」

猛烈に上下するハンドルにしがみ付き、私は覚悟を決めて目を閉じる。

「こいつか……っ！」

力強い打鍵音。空の上で甲高い悲鳴が聞こえた。ばさばさと羽音が遠ざかり、数度の明滅のあと、ARウィンドウはゆっくりとシステムエラーから回復する。

がくん、と最後にひとつ大きく上下動し、コブラが路肩に乗り上げて停車すると同時。視界はブラックアウトから回復し、もとの光を取り戻した。

</ROOM>  
</SYSTEM>

「……………」

「……………」

「——死ぬかと、思った……」

「……いまのは、ちよつとヤバかった……わね。寿命が縮んだわ」

取り戻した視界の中、シートに背中を沈めて教授は大きく吐息。私もハンドルに突つ伏して心から安堵の息をこぼす。コブラは奇跡的に事故を起こすこともなく、数か所の擦過だけで路肩に乗り上げるに留まっていた。

「……………」

まだばくばくと音を立てる鼓動を聞きながら、私は横目に市街を見やる。

無害な立体映像？ そんなわけがない。

勇ましい蹄の音とともに、黒馬に跨って走る首なし騎士の正体は、運転制御系を乗っ取られて暴走する無人リキシャだ。危なっかしいくらいの蛇行運転を繰り返し、ビルや分離帯に激突しては破片を撒き散らす。

街頭端末には環境制御に使われる虫型ドローンがびっしりとたかり、女王の指示のもとゴミと認識した物を片っ端から分解、運搬を始めている。その下でピカピカ輝くのは、フリーザの暴走で凍りついた自販機の飲料だ。アイスバーンになった路面を、トラムが横滑りして横転。黒煙をあげて燻っていた。

「……さっきの訂正。ロクなもんじゃないわ、これ」

「はい」

毒づく教授に心から同意。電腦が乗っ取られているということは、全管理都市である京都の全てが私達に牙を剥くことだってありうるのだ。そこに考え及ばなかったというのは、まったく浅慮だったと言うほかない。

その点、まったく電子化対応されていない化石燃料車を選んだ教授は慧眼だったと言えるのだからけれど——もしこっちに乗っていたのがメリーだったらと考え、自分の幸運に心から感謝して額の汗をぬぐう。

コブラが動くことを確認した教授は、路肩から赤のマシンをのろろと後退させる。

「教授。くれぐれも安全運転でお願いします」

「そうね、善処するわ」

ぐったり呻く私に、教授の返事もどこか強張っている。もう一度同じことをやれと言われて、出来る自信はない。

相も変わらず、怪異に満ち溢れた狂乱の街並み。御所は目前に迫っていた。





北の朔平門を閉鎖していた検非違使局の検問を二言三言であっさりとくぐり抜け、私と教授を乗せたコブラは御所の陣内へと乗り込んだ。

「こうして見ると、壮観ね」

御所の上空では、光り輝くフレイムで描画された大伽藍が、神々しいばかりの光に包まれてゆつくりと回転を続けている。遠目に見たときはケタ違いの威容は、さながらこの騒がしき夜の象徴のようだ。

びゅうと吹き付ける風に帽子を飛ばされそうになり、思わず顔を伏せる。教授は腕組みをしながら、手近な広場にコブラを停車し、大きなトランクを抱えて車を降りる。

「見とれてる場合でもないわね。始めましょうか」

「はい」

教授の話によれば、京都を管理する一大クラウドサーバ《八雲式群》ヤクモククラウドには、障害が起きた時の緊急用として物理アクセスポイントが設けられているという。クラウド状に分割された京都のクラウドサーバ群への一斉命令を可能にする最上位管理権限《紫ノ上》ウルトラバイオレットの奪取。それが教授の目的であった。

権限を付与する暗号鍵はすでに教授のもとにある。問題はそのポイントの場所だ。

「玖渚がうまくやってくれてれば、ここら辺の筈なんだけど……」

調子の悪い複合体を打鍵し、教授はぼやきながら頭をかく。私も処理の一部を分担するが、少々手は回らない。肝心のアクセスポイントの座標が絞り込めないのだ。ARの異常は御所の

中でも依然続いていた。地図は当てにならず、地形にすら被って表示される拡張現実のレイヤが距離感すら狂わせる。焦る気持ちの一方で、作業は一向に進まない。

「だめ、こっちは見つからない……!」

「大丈夫。天才はうるたえないわ。もう一度向こうから試してみて」

指示に従って顔を上げた時、大きな銅鑼の音が背後で響いた。ざわめきを吹き飛ばす太鼓の轟音が、バリケードを吹き飛ばし、ノイズまみれの感情拡張子が溢れ出す。

<Emotion>

【喜】	【喜】	【喜】	【喜】	【喜】	【喜】	【喜】
【怒】	【怒】	【怒】	【怒】	【怒】	【怒】	【怒】
【哀】	【哀】	【哀】	【哀】	【哀】	【哀】	【哀】
【楽】	【楽】	【楽】	【楽】	【楽】	【楽】	【楽】

</Emotion>

「東西、東西!!」  
「東西、東西!!」

「凱旋せよ、凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

やにわにこだまする悲鳴に怒号。警備の人たちを押しつけながら、見覚えのある仮面を付

けた一団が、楽器をかき鳴らし次々に声を上げる。鞍馬会の連中を先頭に、暴徒となった人々と一緒に御所の中に通りになだれこんできたのだ。

「照覽せよ！ 今宵は我等の夜、百と八十年ぶりの大回帰なるぞ！」

どおんと大きく太鼓が打ち鳴らされる。激しくかき鳴らされる楽器に合わせ、彼らを先導するのは山伏めいた装束の男達。槌に薙刀、刺叉、鋸に斧と物騒な得物を手に武装し、その仮面には歓喜の感情拡張子が貼りつかせている。

男達の一人が、振り回した薙刀の先を荒天の中に聳える伽藍へと向けた。

「見よ、これなるは我らが都！ この地を統べる真なる大伽藍よ！ 今宵は宴、妖と幻想の大回帰の時！」

「大回帰の時！」

「天に伽藍、地には百鬼、歓喜の夜はここに成る！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

狂奔にうねることく、感情拡張子の洪水が広場を飲み込む。人の津波が雪崩を打つように御所中央へと殺到した。

「……つたく、こんな時に。迷惑考えなさいよ！」

幻想世界の到来を叫び、歓喜に打ち震える人々の感情拡張子が爆発し、視界を隙間なく埋め尽くす。情報密度の過密がリソースを吸い上げ、ただでさえ不安定なヤクモクラウドのA

R制御が喰われていく。モザイク模様に描画遅延した視界の中、天の大伽藍はいまや輝きを増しながら光の滝となつて、地上へと降り注がんとしていた。

「教授！ こっち！」

喧騒の波から逃れ、私はコブラに飛び乗つてエンジンを始動させる。485馬力の動力機関が猛然と唸りを上げて威嚇するも、彼等は全くひるまない。正体を仮面に隠した無表情のまま、車体を取り巻くように詰め寄ってくる。

<Anonymus>

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】 プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

</Anonymus>

正体なき仮面の群れに囲まれたまま、教授はじりじりと後退。私はハンドルを繰ってコブラをターンさせ、包围を抜けようと試みるが、分厚い人垣を突破することは叶わず、仮面の集団をますます勢いづかせるだけだった。

「東西、東西!!」

「東西、東西!!」

「凱旋せよ、凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

「聞く耳……持つけないわね。宇佐見、構わないでこいつら全員ふっ飛ばしなさい!」

「ああもうっ、どうなつても知らないからね——」

「——伏せる宇佐見っ!」

私がアクセルを踏み込み、仮面の群れが私達を飲みこもうとしたその刹那。

人垣の隙間に派手な爆発が起きた。大量にバラ撒かれた筒状の物体が連続した破裂音を響かせ、七色の煙が舞いあがる。みるみる彼等を包み込む煙幕の向こうから、うおんと鋭いエンジンジンの唸り声。

御所を囲む外壁を飛び越え、ウラル・サイドカーが御所に乱入する。広場を滑るように旋回したサイドカーから、どおんと空気を叩く射出音。白いネットにぐるぐる巻きにされた仮面達が次々に地面に転がる中、白い水兵服が声を張り上げた。

「教授、宇佐見、無事か!」

サイドカーの運転席には、煙を吹くバズーカを構えたちゆりちゃんがいた。ハンドル足を駆けて立ち上がり、さらにもう一発。轟音とともに飛び出した暴徒鎮圧ネットが狙いたがわず鞍馬会の連中を拘束する。

メリーが差し出した拡声器を口に当て、ちゆりちゃんは馬鹿でかい音量であたりに叫んだ。

『そこのお前ら！ 私達の邪魔とはいいい度胸してるじゃないか！ いいぜ、やるってんならいくらでも相手になってやる！ 武器なんか捨ててかかってきな!!』

獯猛な笑顔を見せて周囲を威圧し、ちゆりちゃんは立て続けにバズーカの引き金を引いた。さらに数名がネットに拘束されて地面に転がる。

ざわめく仮面の一団に、煙を吹くを爆竹を投げ付けて激しく威嚇。

『どうした、こいらないならもう一発行くぜ?』

ちゆりちゃんは空になった砲身を放り捨て、さらに次のバズーカを取り出して周囲に向けた。砲筒を向けられた仮面の集団から溢れる感情拡張子が大きく乱れ、彼らの間に動揺が波紋のように広まってゆく。

サイドカー上のちゆりちゃんと、鞍馬会。睨み合いの中、両者の距離がじりじりと開く。

そこに、激しく鳴り響く警笛の音。

『京都検非違使局の小兎姫です！ 全員、そこを動かないで!』

屈強な護法たちを引き連れて乱入するのは和服の女性。御所になだれ込んだ暴徒を抑えるため、検非違使局が駆け付けてきたのだ。

形勢不利と見るや、仮面の一団は一斉にその場を退いた。網に絡まった仲間を放置して我先に逃げ出してゆく。

「確保です！ 逃がしちゃだめ！」

十手を突き付けて叫ぶ女性に、護法達が広場になだれ込んだ。逃げまどう仮面達を追いか

<Warning>

【警告】

無許可での御所内への立ち入りは禁止されています！  
あたちに退去しなさい。

【警告】

</Warning>

け、次々に取り押さえていく。広場の混乱は最高潮に達し、なおも逃げようとする者、一矢報いんと反撃するものの、押し合いへしあいの中で派手に転ぶ連中まで出始め、そこかしこで怒号と喧騒が上がる。

「ふい……危なかったぜ。さっきので弾切れだったからな」

どさりと操縦席のシートに腰を落とし、大きく安堵の息。バズーカを放り投げてちゆりちやんが額の汗をぬぐう。

「蓮子、無事!」

「なんとかね。……トリフネ以来の大冒険だったわ」

駆け寄ってきたメリーにこたえ、強張っていた両手をハンドルから引きはがす。親友と再会できたことに胸の中で感謝した。

「遅いわちゆり。どこかで寄り道してたんじゃないでしょうね」

「ヒーローは遅れてやってくるもんだぜ。なあ？」

「言ってくれるわねえ。無駄口叩いてないで用意しなさい。時間がないわ」

「へいへい、了解。……宇佐見達も手伝ってくれ」

短く状況を確認する言葉を交わし、教授とちゆりちゃんは作業に戻る。

雨足はかなり収まってきていたが、風はますます強くなり、雷鳴は再び激しく唸りだしていた。渦巻く黒雲から迸る稲光が空を駆け、天空の大伽藍を屋根を取り巻くように跳ね回る。

空がうねる。黒雲が膨らみ、一際大きな雷光が御所へと突き立った。



夜闇を引き裂く閃光が、空気を帯電させてぱりぱりと揺れる。

「きゃあ!!」

目と鼻の先への落雷に、思わず耳を押さえる。雷鳴の余韻の中、鼻につくオゾンの匂いに顔をしかめ、恐る恐る空を見上げる。

「近いな……」

なおも稲光を閃かせる黒雲を見上げ、ちゆりちゃんが腰のポシェットから取り出した小さなアンカーを宙に打ち上げた。

「ま、気休め程度だけだな。バーベキューになる確率が何割か減るなら御の字だろ」

宙空に張られたアンテナの具合を確かめ、ちゆりちゃんは小さくウインク。内臓動力でホバリングする避雷針だ。

呆れた声は、ちようどその反対側の屋根の上から聞こえてきた。

「まったく。大人しく避難してってくれといったはずだよ」

雨に濡れたフード、煤けた頬。ほんのわずかな距離にいただけに、すっかりボロボロになった小さな姿がそこにあった。

パーカーの裾を絞りながら、ナズちゃんは軽々とした身のこなしで私達の前に着地する。

「……わざわざ追ってきたのかい。つくづく呆れたお人よしだね、君達も」

「ナズちゃん! 平気だったの!」

「ああ。あれだけ人がいるんだ。紛れこむくらいは簡単だよ」

パーカーのポケットから、鞍馬会の連中が被っていたのと同じ仮面を取り出してみせるナズちゃん。

「君たちの大義に感動したので、一緒に参加したいと言ったら簡単に信用してくれたよ。電脳化処理とやらをしていなかったからなのかもしれないが」

「なるほど、その手があったわね」

いま気付いたわと手を叩く教授を尻目に、ナズちゃんは表情を険しくする。

「今からでもいい。急いで離れるんだ。これは君たちの手に負えることじゃない。さっきのような事だっていっ起きるともしれないだろう。命の危険だってある」

「わかってるわ、そんなの」

「わかってない！ あれがどれだけ危険なものなのか、理解してくれ！」

チウ、と鳴きかけたアルくんを制し、ナズちゃんはさらに一歩。

「そもそも、これは私の責任なんだ。無関係の君たちを巻き込むなんて——」

止め寄ってくるナズちゃんを制するように、手のひらを前に突きだした。

「はいストップ。そこまで。……ねえナズちゃん。あなた、ひとつ勘違いしてるわ。別に私達はあなたの手伝いがしたくて来たんじゃないのよ」

「は？」

「いい？ 私達は秘封倶楽部。この世界の不思議を探し、秘密を暴くサークルなの」  
一本立てた指を、ナズちゃんの目の前にずいと突き付ける。霧雨の空に手を広げ、紫の空

に浮かぶ伽藍を示し、

「それなのにさ、ナズちゃんは意地悪ばかり言うじゃない。こんな、見たこともない大イベントが起きてるのに――黙っておうちで待ってなさいなんて方が酷だと思わない？」

ちら、とメリーと視線を交わし、ぐっと帽子のつばを弾いてとびきりのウインクを一つ。

「もう、勝手ね。蓮子は」

「あら、メリーは違うの？」

「――残念ながら、全面的に賛成ですわ」

たおやかな笑顔。うん。それでこそ我が相棒だ。

腕組みして頷く教授の横で、ちゆりちゃんはサイドカーのハンドルに身体をもたれさせて苦笑いを浮かべていた。

「……は」

ぽかんと口を空けて私達を見上げていたナズちゃんは、私たちの顔を見回し、やがてゆっくりと深呼吸をひとつ。

アルくんと一緒に、煤に汚れた頬を拭って、大げさに肩をすくめてみせた。

「きみたちは、じつにばかだな」

それはたぶん、私たちとナズちゃんが出会ってから、一番素敵な笑顔だったと思う。

ナズちゃんは、この異変の正体を確信しているのだ。だから一人で姿を消したのだし、さつき仮面の変装だって、鞍馬会の連中が宝塔をもっているかを確かめるためにしていたものだろう。

「信じられなければ、与太話だと思つて貰つても構わないが——ひとまずは前提として聞いてくれ。私が探している宝塔というのは、毘沙門天様の由来をもつ法具なんだ。それ自体が大きな力の源であり、所有者に力を与え、怪異を払うことも容易い。逆に、悪用すれば天変地異も引き起こすこともできる」

毘沙門天。仏教において武神とされる天部のひとり。宝塔とはその武神の持ち者だといふ。なんとも壮大な話だ。

【伊<sup>イザナギ</sup>弉<sup>ギョブ</sup>物質<sup>ブジエクト</sup>の一つと考えても良いのかしら？】  
【かもね】

手を握って形成したPANの直結接続でメリーとこっそり内緒話。

「それは奮った話ね。その宝塔ってのは、誰でも使えるようなもののなの？」

「正確なところは分からないよ。この宝塔は本来、私の上司がとある方から預かっているもののだが——その許可がない私にも使うことができた。であれば、宝塔を手にした悪意のある者が、この天変地異を引き起こしていたとしてもおかしくはないだろう」

「確か上司さんがそれをなくしちゃったから、ナズちゃんが探しに来たのよね？」

「そうだ。どういう訳か彼女はよくものを失くしてばかりで、往々にして私がその尻拭いをする羽目に——いや、この話は余計だな。このような事態になることを防ぐのが私の役目だった。……実際は見つけるどころか地図一つ読めずにぐずぐずしていた挙句に、この様だ。探索屋の名が泣くね」

わずかに自嘲を滲ませ、ナズちゃんは肩を竦める。……もしかしたら、ナズちゃんはさっきまで、検非違使局が来るまでの時間稼ぎをしてくれていたのかもしれなかった。

「なるほどな、事情は分かった。けど、あいつらがその宝塔ってのを持ってるかどうかは確かめられたのか？」

「確証はない。内部まで潜入する前にさっきの騒ぎだったからね。だが、恐らく間違いないだろう。これだけ探してどこにも見つからないんだ。誰かが意図的に隠しているのしか考えられない。この嵐にしても、どう見ても尋常ではないし——」

ナズちゃんが言いかけたその時だ。またも上空に渦巻く黒雲から、ぱりぱりと放電の予兆。

「伏せろ！」

ちゆりちゃんの声に、私はメリーの身体を地面へと引き寄せる。放り出された鞆が地面に落ちるとほぼ同時、御所の中へと落雷があった。

まさに、神鳴る怒槌。光の柱と見まごうばかりの雷光が地面へと叩きつけられ、空気を叩く轟音が、びりびりと窓を揺らし、木々の梢を軋ませる。

「……………ッ」

鳴り響く雷鳴が遠ざかるまで、ごうごうと揺れる黒雲と暴風の下、私達は身を寄せ合ってじっとしていた。ちゆりちゃんが打ちあげていた避雷針は、跡形もなく燃え尽きている。

「行った、な……？ 怪我はないか？」

「ええ……大丈夫。ほら、メリー、もう平気よ」

目を回しているメリーを立たせ、上着をはたく。突っ伏した地面が水たまりだったせいで酷い有様だが、もうそんな事を気にしている場合ではないだろう。

「ナズちゃん、平気？」

「痛たた……ん……な、なんとか、ね。……アル、ここに入っていて」

ナズちゃんは恐怖で毛を逆立たせている白い毛玉を両手でそつとなだめ、パーカーの下の内ポケットに戻していく。それから顔を上げて、眉をしかめて目元を擦る。

落雷の衝撃が原因だろうか。ナズちゃんのARグラスのレンズの片方が割れていたのだ。

吐息と共に割れたレンズをそつと外すナズちゃん。

その、時。

「あああああああ!？」

いきなり大声を張り上げたナズちゃんに、全員が思わず飛び上がってそちらを見た。ナズちゃんはわなわなと肩を震わせながら、四つん這いになって地面に落ちたメリーの鞆へとにじり寄る。

「こ、今度は何!？」

「こ、これ……、なんで、こんなところに……!？」

ナズちゃんが指差しているのはメリーの鞆から転がったタケノコだった。水溜りに落っこちてしまったそれを恐る恐る拾い上げ、固めた拳で地面をたたく。ぱしやんと小さな飛沫が散った。

「なんて、ことだ……こんな……こんなこと……っ」

タケノコを握りしめ、わなわなと震えだすナズちゃん。目には悔恨の涙まで滲んでいた。なんのことか分からず首を傾げる私達に、ナズちゃんは赤くした鼻を擦りながら、拾い上げたARグラスを片目に当てて、交互に目を閉じてはタケノコを覗きこむ。

「……ちよつと待て」

固い声音でつぶやいたちゆりちゃんがポシェットを漁り、青い液体の入った小瓶を取り出した。医療触媒で生成した生器官高分子（バイオポリマー）を洗い流す目薬である。

ちゆりちゃんは恐る恐る目薬を左右の目に差して、瞬きを数度。ナズちゃんの様子をじっ

と見つめてから、大きく息を吐いた。

「そういうことか。見てみな宇佐見」

差し出しされた目薬を受けとって、私もちゆりちゃんに倣う。

片目だけ点眼した目薬が、眼球表面に生じた生体器官のARコンタクトレンズを洗い流す。羽根の生えた蛇のIDがぼやけて剥がれ、視界に嚴重に被せられていた拡張現実のレイヤが取り除かれていく。

生の視界に飛び込んだのは、ぼんやりと光を放つ四角屋根。

ナズちゃんの握りしめるタケノコは、まさに彼女が探し続けていた法具——毘沙門天の宝塔の姿を取り戻していた。

「あー……メリー？」

「ええと……」

思わず視線を向けた先で、メリーが顔を反らす。それを捕まえてこちらを剥かせれば、相棒はてへぺろと舌を出してみせた。

【ちよっと！ まさかメリー、あなた、分かってて持って来たんじゃないわよね!?】

【そんなことしないわ！ 泥棒じゃない！ ……単に、光るタケノコが落ちてるなんて珍しいから持ってきただけよ!】

そう言えば、メリーがあれを拾ったのはお寺だとか言っていたような覚えがある。

【だからって、もう少し考えたっていいじゃない!】



【だって、光ってたのよあのタケノコ！ おかしいと思わないの蓮子？ タケノコが光りますか、あなた？】

【そういう問題じゃないでしょ!】

醜い争いをする私達を余所に、まだその存在が信じられないらしく、ナズちゃんは何度も宝塔を撫でまわす。

「……どうして、こんな近くにあったというのに……なぜ気付かなかったんだ……？」

見るからに落胆するナズちゃんの憔悴ぶりと言ったら見ていられなくなるほどで、アルくんがたどたどしくその落胆を慰めていた。いや、まあ、そのショックは分からなくもない。

「ああ、やはり私は、臆病なだけの無能者だ。目の前にお宝があるのに能力が反応すらしないなんて……ふふふ。まったく、良い面の皮じゃないか。こんな有様で、ご主人のためになんとしても取り戻そうなどと、おこがましいにもほどがある。こうして空回るくらいがお似合いと言う訳か……」

「えーと、たぶんそうじゃないと思うわ!」

このまま放っておくのはいかにも良くないと思い、無理矢理に口を挟む。

「ナズちゃん、何度も私達のところに来てくれたじゃない。最初に別れたあとも、反対方向の五条まで。あれってさ、ナズちゃんのダウジングが知らないうちに私達の間所を探してたってことじゃないかしら。ナズちゃんは最初から、正解を見つけてたのよ!」

頭の中で必死に論理を組み立てて、ナズちゃんにまくしたてる。

「そうよね、ナズちゃんがちゃんと正しい道を選んでくれたから、狂ったARの中で迷っちゃったわけだし」

「そうそう！ だから落ち込むことなんかないって！ ね！」

必死の説得。果たしてどこまで功を奏したのかどうかまでは分からなかったけれど、ナズちゃんはスンと鼻を鳴らし、小さく頷いてくれた。

「……なあ、一体どういうことだ、こりや？」

「どうだっさいわちゆりちゃん。なんにしたって見つかつて良かったじゃない」

「そうそう。あいつらから取り返すよりもずっと楽だったんだし」

後で謝ろう。メリーと二人、こっそり視線を交わして頷き合う。

「ね、ねえ教授！ それより、さっきのアクセスポイントの話なんだけど！」

「ん？」

あまりこの話題を続けるのはまずい。教授を呼びとめて無理やり会話の流れを変える。

「場所が分からないなら、ナズちゃんに探してもらえばいいんじゃないかしら。今ならダウジングもちゃんと働くはずよ」

「……ん、なんだい、それは」

宝塔を丁寧な鞆にしまいこむナズちゃんに、かくかくしかじかで説明をする。まだ消沈していたナズちゃんだが、成程と頷いて、腰を上げてくれた。

「そういうことか。……よし、やってみよう」

ペンデュラムを胸元に戻し、代わりに取りだしたのは腰の後ろのL字のロッドだ。2本ひと揃いのロッドを左右の手にそれを構え、バトンのようにくると一回転。

遠く響く雷と雨の中、ナズちゃんはロッドを構えたまま慎重に歩き始めた。広場から御所の庭に出て、いくつもの殿の屋根の下を通り、池の脇に植わる木々をかき分けて、ゆっくりと進んでゆく。ときどき立ち止まっては左右にロッドを振り、動作を確認。

教授たちと揃ってそんなナズちゃんについていくことしばし。ぴくりと跳ねたロッドの先が、大きく左右に開いた。

L字の先端が指し示すのは、山水の苔生す岩の一つ。

どこからどう見ても、何の変哲もない岩に見えるが――

ナズちゃんの肩でアルくんがチウと鳴く。それにこくりと頷いて、ナズちゃんは吐息。

「これだな」

「ちゆり、お願い」

「了解だぜ」

教授の命令を受けたちゆりちゃんはすっ飛ばるようにしてサイドカーまで走り、両手に機材を抱えて戻ってきた。ごてごてと複雑な機構の付いたアンテナを広げ、何本ものコードを引っ張り出して年代物の物理キーボードを接続する。そのまま服が汚れるのも構わず、岩の下にかがみこんでキーボードを押し込み、複雑なコマンドを打鍵する。

固唾をのんで見守る私達の前で、突如岩が光を放ち、濡れた表面に亀裂を走らせた。

<SYSTEM>

【八雲立つ】【出雲八重垣】【妻籠みに】

【八重垣作る】【その八重垣を】

</SYSTEM>

神話の一節に連なる三十一文字の承認メッセージがウィンドウを横切る。ARに表示されるのはアマテラス機関の所有を示す八角形のロゴ。教授の持つ暗号鍵に反応し、京都を守護する多重結界《八重垣エイトフールド・フエンズ》、そしてその制御を司るクラウドサーバ《八雲式群ヤクモククラウド》の物理筐体端末、《天磐屋戸アマイハヤド》が門戸を開く。

目を丸くする私達に、ちゆりちゃんは会心の笑み。

ぶしゅうと白い煙を噴き出してせり上がってきた岩の外板に手をかけ、ちゆりちゃんは目まぐるしい勢いでコマンドを叩き、内部に保護されていた物理筐体を引き出した。内部の配線と基盤をチェックし、背面のカバーを上げて、錆潰された接続タグを次々に開放していく。

「——当たりだ。……いけるぜ、教授」

「よしっ」

教授は提げていたトランクを地面に降ろし、底面にあるペダルを踏み込んだ。鈍い機動音が響き、トランクが小さく振動する。アクセスグリッドが展開し、赤いトランクの表面を無

<SYSTEM>

Clouds covered the  
eightfold fence; making the  
eightfold fence to keep my  
new wife in the house;  
great eightfold fence.  
</SYSTEM>

数の光が行き来し始めた。大規模な情報の奔流を示す赤いラインがその場に溢れだす。

教授が持っていたトランクの正体は、個人携行用の大規模物理複合体だった。核融合を動力とし、その制御能力は京都大学研究室の占有サーバ4基分にも匹敵するという、曰くつきの品。岡崎教授の変人ぶりを世界に知らしめた超々高性能コンピュータだ。

しかもどうやら今日はそれだけでないらしい。トランクの上部からせり出した銀色の円盤が展開し、ぐんぐんと高速回転を始める。エミュレーターの仮想ウィンドウが跳ねあがり、XT6800の化石めいたクラシカル・スタイルのロゴをポップさせる。

「……ね？ なんでも準備はしておくもんでしょ？」

「用意した私の苦勞も少しはねぎらって欲しいもんだぜ」

「無駄口叩かない！ やるわちゅり、留琴！」

「へいへい」

【はぁーい！】

ポップしたウィンドウに、メイドさんの二頭身アバターが出現。

ちゅりちゃんも教授の赤いトランクから伸びたコードの束を、ヤクモクラウドの物理筐体に接続。電源となる核融合炉ジェネレータが出力を安定させ、調整化の済んだウィンドウにブートメッセージが流れ、赤い苺のロゴマークが回転する。空気を吸い込むような音と共に、岡崎研究室謹製のOSが起動した。

時代も、世代も、言語も違うシステムが、可能性世界の上で共に手を取り、教授の元に揃

って集う。揃いの赤い知性眼鏡をかけ、教授とちゆりちゃんは電腦の世界へと没入。

<SYSTEM>

The Probability Space Hyper Vessel

可能性空間移動船、起動完了。

臨時仮想サーバ《七元徳》展開。稼働率上昇中……

GM／岡崎夢美にクラウド最上位アカウント《紫ノ上》承認。

各種システム接続完了。

</SYSTEM>

【ようこそ、ご主人さま！】

【留琴、最上位管理者権限で命令！】  
【コマンド

に回しなさい！】

【はあいー！】

Hyper Vessel

Control Panel

Monitor

Input Data

Output Data

Hyper Vessel

Hyper Vessel

Hyper Vessel

Hyper Vessel

Hyper Vessel

【節制】、【剛毅】、【信仰】、【正義】、【希望】、【思慮】、【慈愛】。教授の周囲にARで描

かれた七本の輝く十字架が展開。強制割り込みメッセージが表示され、赤いウィンドウが周囲に溢れだした。光子と光波のプログラムは、教授の提唱する非統一魔法世界論と可能性世界論理に基づき、拡張現実を多層構造化してクラウドサーバの調整化を行ってゆく。

混乱に満ちるネットスフィアを可視化したウィンドウに、次々と赤の十字架が突き立ち、

エラーコードが制圧されてゆく。バグの領域を示す黒はあつという間に駆逐され、スフィア全土に教授をたたえる赤の旗が閃いた。見る間に整調化されたARからノイズが消え、精度が安定。ずっと存在しない接続先を探してエラーを吐き出し続けていた私達の複合体も次々に落ち着きを取り戻す。

続いて読みこまれた聖句が天候制御モジュールに介入。吹き荒れる嵐をものともせず荒れ狂う気流の中心を目指す。標的はヤクモクラウドの中に潜む悪辣な毒蛇。間近に迫る敵対者を察知し、黒い毒蛇はダミーを撒き散らして8つに分裂。それぞれの首から攻勢防壁を撒き散らし、別々の方向に逃げだしてゆく。

が、教授は妨害をものともせず、雷避けの聖句で閃く雷跡をかくぐり、叩き付けられる雷の塊を焼き尽くした。騎士電影が荒れ狂う毒蛇の群れとキリングコマンドの応酬を繰り返し、染みだすバグの毒牙から戦車電影が中枢を守る。

赤と黒が入り乱れ、拡張現実反映される輝きはさながら本物の銃火。速さを競う論理タイピングは途切れぬ弾幕だ。

「ちゆり、標的の座標補足！」

「もうやってるぜ。送った！」

マーカレーザーが照射され、プログラムの隙間に潜む不埒な侵入者を補足した。すかさず先回りした留琴が自らの身を囿にして、毒蛇の8つの首それぞれにワクチンウエアを叩き込む。猛烈な濃度のデータ量を流し込まれて混乱し、酔歩を始め毒蛇。

そこへ教授が割り込むのは同時だった。

「よし、捉えた！」

何千何百と言う赤の十字架が突き立つ。十字架は相互に作用を補完しながら、多重防壁を展開して八重の妻籠みに悪蛇を追いつめ、隔離。

「ちゅり！」

「いけるぜ、教授！」

【—— Don't Leave Me Alone, Daisy!】

発射許可の最終パスワードが実行。論理コマンドが拡張現実の空を走る。

<SYSTEM>

標的補足。InterCentral Ballistic Missile  
中枢間弾道ミサイル【M-i-M-i】全弾発射。

</SYSTEM>

標的に喰らい付いて自爆する誘導推進型攻撃プログラムは、赤い檻に囲まれた悪蛇へと殺到。獐猛な論理の牙をかくぐり、その鱗を両断する刃をねじ込んで、自壊しながら多頭の悪蛇を引きちぎった。

神話級ハッカーの戦いを目の当たりにし、私達は言葉もない。目まぐるしく世界を行き来するプログラムコードは呪文めいて溢れ、飛び交う会話と閃光は、まさに光子と光波を操る



魔法<sup>ウィザード</sup>使いだ。

「よし！」

教授が会心の笑みを見せ、知性眼鏡をずらして叫ぶ。

「制圧完了。これで制御はこっちが握ったわ。あとは——問題の核を見つけて叩くだけね」  
 仮想キーボードを凄まじい勢いで論理タイプしつつ、教授は四方八方のウィンドウを確認。  
 右と左の脳で別々の作業をこなしてでもいるのか、どの動作もまるで澁みない。

「宇佐見、マエリベリイ、私達はここで天候制御モジュールの鎮圧を続けるわ。貴方達はヤクモクラウドにアクセスしてる物理サーバの在り処を探して！」

「え」

置いてけぼりにされていたところへいきなり話を振られ、呆けていた頭が我に返る。教授はひらひらと手を振り、筐体とトランクに接続された物理コードを示してみせる。

「こんな馬鹿騒ぎを起こした首謀者の顔、ぜひ見てやりたいんだけどね、ヤクモクラウドがこんな状態じゃここを離れられそうにないのよ」

通信を介した遠隔アクセスはまだ回復しておらず、拠点制圧には筐体との物理接続が必須である。まだ外部からの攻撃は続いており、サーバを保護するため2人はこの場所を離れられないということだった。

「このサイバーテロ、鞍馬会から犯行声明が出たのは確かなんだけど、どうも時系列が怪しいわ。本音を言っちゃうと正直便乗くさいのよね。連携取ってやつてるとは思えないの」

SYSTEMA

【1】

システムに異常を検知しました。I.Z.netを再起動しています。

SYSTEMA

「実際、連中も制御できてないよな。むしろ一緒になって騒ぎたいだけじゃないか？」

お祭り。そう。確かにそうだ。彼等の高揚は世の中をひっくり返すことへの渴望によるものではない。天狗党はそもそも科学世紀を転覆させようなんて大それた事は考えていないのだ。彼等の原動力はもっと単純で原始的な——失われた幻想への憧憬。非日常への憧れ。そんなものだ。

「東西、東西!!」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

「凱旋せよ！ 凱旋せよ！ 鞍馬の山より凱旋せよ！」

遠く聞こえる彼等の叫び声。

あと先を考えずに、高揚に身を任せて騒ぐ——非日常の象徴。だからこそ仮面に顔を隠し、自分の姿を変えて馬鹿騒ぎをする。東京で同じような活動に勤しむ人々を見ていた私には、分かるような気もした。

「電脳処置忌避って主張からするなら、理念的にも、技術的にも、そういう方法を取るはずなのよ。だったら下手にクラウドサーバ上での反撃を考えるより、もっと原始的で、シンプルなやり方が有効かもしれないわ」

「——原始的？」

聞き返した私に、教授はぐっと腕まくりをしてみせる。

「見つけて、とっ捕まえろてことよ」

「……それはさすがに単純すぎないかい」

「六掛ける九は四十二。世界の謎の解はシンプルで美しくないよね」

ナズちゃんの苦笑に、自信たっぷりに言い切る教授。ああ、どこまでもこの人は岡崎夢美だ。たとえ今日世界が終わるとしたって、変わらずに在り続けるのだろう。

「できるでしょ、秘密と境界を暴く——あなたたち、秘封倶楽部なら。この馬鹿騒ぎを起こしてる、幻想の正体を見つける事が」

ふっと笑顔を消し、平然と世界を救って魅せる英雄の真摯な視線が、じつと私達を見る。そんな教授の期待を受けて——答えなんて、とうに決まり切っていた。

「……それを言われちゃ、ねえメリー？」

「ええ。仕方ないわね、蓮子」

二人で顔を見合わせて、しっかりと返事をした。よしと頷く教授が、私達の肩をたたく。「及ばずながら協力するよ。最後まで力は力にならないからね」

ナズちゃんが首に掛けていたペンデュラムを外し、私に放り投げた。受け取った私の手元で、正八面体のペンデュラムは浮かび上がり、くるくると回って一方を指し示す。

「それを持って行ってくれ。道案内くらいはできると思う！」

「さんきゅ。教授、車借ります！ いこ、メリー」

「ええ」

3人に挨拶して、広場に止めたままのコブラまで駆け戻る。幸い、鞍馬会の連中は離れた

<SYSTEM>

Internetを再起動していただきます。そのまましばらくお待ちください。

</SYSTEM>

まま。検非違使局も戻っていない。運転席に身体を滑り込ませ、エンジンキイを押し込んだ。助手席についたメリーがシートベルトをするよりも速く、アクセルを踏み込む。

「……あれ？　そう言えば蓮子、運転って——」

「飛ばすわよメリー、しっかりつかまってなさい！」

「え？」

メリーの悲鳴を後に残し、485馬力のモンスターが咆哮を上げた。

<SYSTEM>

Internetを再起動しています。そのまましばらくお待ちください。  
</SYSTEM>

1900 at 00:37

京都国際駅。首都と全世界を繋ぐのターミナルステーションは、卯酉東海道新幹線ヒロシゲの開通とともに拡充を続け、神亀の遷都と共に再建された。前世紀の記録映像を元に拡充再建されたその構造は、京都で景観条例の例外となっている数少ない建造物の一つ。

ナズちゃんから預かったペンデュラムの案内に導かれ、私達が辿りついたのは、そんな高さ60m、幅480mの巨大なジググラトだった。

日本の首都を睥睨するランドマーク、その東端。落差35m、一七一段の石段が作る赤煉瓦の大階段の頂上にある、屋上庭園が、私達の最終目的地だった。

ナズちゃんに手渡されたペンデュラムは、力強くここを指し示し、異変の核となる存在を示していた。

「――はず、なんだけど」

地上60mに吹き付ける雨風は地面近くの比ではない。空に渦巻く黒雲には雷光が切れ間なく閃き、不気味な唸りを上げている。メリーと二人、飛ばされそうになる帽子を押さえて

<SYSTEM>

Internetを再起動して  
います。そのまましばらくお  
待ちください。

&lt;/SYSTEM&gt;

目を凝らす、求める者の手掛かりは見つからない。

【宇佐見、聞こえる？】

渡された通信機も既に省電力モード。教授の声だけがスピーカーの向こうから途切れ途切れに聞こえてくる。通信は復帰したが、ARは御所を離れるとほとんど役に立たなかった。精一杯アンテナを広げ、ノイズの海に沈んだ接続先を探す、電源の残量を見る間に失われていくばかり。汗に湿る受話器を耳に押し当て、かろうじて届く教授の声に耳を済ませる。

【鞍馬会の先回りは出来たみたいね。検非違使局が大分頑張ってるみたいだけど、まだ暴れてる連中が残ってるみたいだから気をつけて】

【はい】

【要点だけを説明するわ。端的に言えば、今回の犯人はプログラムのエラーコードよ。ただのエラーで片付けるにはどうにもおかしいことが多すぎるんだけど、ややこしいことはどうでも良いわ。要は、そのエラーを起こしてる奴がどこにいるのか、それが分かれば座標を固定してデコード出来るってこと】

混乱のさなか、教授は冷静に今起きている事態を解説してくれる。

これはお祭りなのだ。人と科学の支配する科学世紀の京都に、古く染み込んだちと闘争の歴史。千年の歳月が、怪異の記憶となつて反旗を翻している。

さながら、幻想のレイヤが記述する<sup>ゴーストスクリーン</sup>仮想の記憶。拡張現実<sup>拡張現実</sup>に描き出された幻想は実体を覆い尽くし、結界のように私達の目から真実を覆い隠しているのだという。

SYSTEMA

現在、京都のネットスフィアに大規模な障害が発生しています。現在復旧作業を行っていますので、しばらくお待ちください。【玖】

SYSTEMA

【もう少し人出があれば、物量で拡張現実のレイヤを引つpegして、居場所<sup>アドレス</sup>を見つけられるんだけど——いまはもつとシンプルな方法に頼るしかないわ。あなた達に。

……いい？ 宇佐見、マエリベリイ】

教授はいっになく真剣な声で告げた。

【さっきの認識の話、覚えてるわね。彼思う故に我在り。自己を確定するのは他者の観察。あなたたちならこの意味が良くわかるはずよ。ARの異常で私たちの認識がずらされて、正体不明になることがこの混乱を生んでいるのなら、それが何であるのかを観測して、見極める力が、それにあらがう力になるわ。不可能を滅ぼすのは、いつだって疑うこと——一息。

【見えず、触れず、声の聞こえないドラゴンは、疑うことで退治できる。だから——】

再びノイズが激しくなり、教授の声は雑音の向こうに飲み込まれた。残り僅かな電源残量までもがみるみる失われていく。けれどももうそれで十分だ。休眠状態に入る通信機を鞆に放り込んだ。

「……………」

疑う力。私はじつと息を潜めて、大階段に視線を凝らす。反応を続けるナズちゃんのペンデュラムを手を、合成の赤煉瓦が連なる巨大な天への階を睥睨した。普段は国内・国際線のターミナルとしてこった返す巨大な駅舎は、今はまったくの無人。廃墟めいて空虚な構内を、途切れ途切れの照明が照らし出している。

「この中のどこかに、犯人が隠れてるってことかしらね。どうしようメリー、手分けして探してみる？」

「蓮子、気を付けて」

「多少の危険は覚悟のうえよ。いつもの倶楽部活動と同じ——」

「違う、蓮子っ！」

「え」

突如、金切り声のようなメリーの悲鳴があつた。右手が掴まれ、ぐいと引つ張られる。バランスを崩して倒れ込んだ身体が階段の上を転がり、背中を打ちつけて息ができなくなる。

私の代わりに犠牲になったのは、慣性に従つてその場に残ったナズちゃんのペンデュラムだった。指に絡まる鎖が根元で千切れ、深々と抉られた赤煉瓦の階段を、ペンデュラムがからからと転がり落ちていく。

穴の開いた帽子が、ぺしやんと水たまりに落ちた。

「っ……………」

視界の端で、金属製の手すりが真つ二つに両断される。地面に引き倒した私の体を、抱え込むようにしてきつく抱きしめ、メリーは小刻みに震える眼を見開いていた。

揺れる青い瞳を彩るのは、恐怖。ばきり。

地面に転がっていた小さな石片がふわりと宙に浮かび上がり、砂になって碎ける。

◇SYSTEM◇

【一】

重大なエラーが発生しました。システムをシャットダウンします。

◇SYSTEM◇



ちりちりと空気を焼くオゾンの匂い。濡れた髪の先が帯電してわずかに逆立つ。がらんと倒れる手すりの下で、ぱりっと放電が起きた。

「……っ」

ゆっくりと首を捻って目をやれば、数mに渡って抉り取られた大階段。分厚い赤煉瓦が基礎まで深々と切り裂かれていた。

喉が乾いた空気の音をこぼす。いま、メリーに引つ張られていなければ、私の身体は右左に分かれてあそこに転がっていたかもしれない。

背筋をぞっとするものが這いあがり、嫌な汗がぬるりと首筋に吹き出す。

「蓮子……居るわ。そこに……そこに、居る！」

私の上に覆いかぶさったまま、切羽詰まったメリーの声。

さんと耳鳴りがした。

居るのだ。今そこに、見えもせず、触れられず、声も聞こえない、不可視の毒蛇<sup>ドラゴン</sup>が。

メリーの眼だけが、この世の隙間に紛れる不可視の化け物の存在を、探りだせる。

慌ててコンタクトを洗い流した右目を見開くが、そこには変わらず、京都駅の屋根が拡がるのみ。風が震え、分厚い黒雲が押し寄せる。ざあと降り出した雨が全身を打ちつける。

「メリー、見えてるの!？」

「蓮子には見えないの!？」　ッ、来る、伏せて!!」

言葉と同時にメリーが私の腕を思い切り引つ張る。段差を転がり、階段を滑って落ちる私

達のすぐ目の前を、何かが通り過ぎる気配がした。

直後。駅舎の反対側で爆音が跳ね、閃光が瞬いた。突き立つ雷光が跳ね回り、夜の闇に聳える京都駅が揺れる。植え込みの木が燃え上がり、ぱちぱちと炎に黒煙をまき上げる。

駄目だ。やつぱり見えない。何度も目を擦って見開くが、ARの視界にも、裸眼の目にも、吹き付ける雨風の中に標的の姿は見出せない。

「ちよつと……これは……なんともハードモードね」

きいんと甲高い耳鳴りの中、ぼやいて痛む背中を起こそうとしたが、腰から下がまるで言うことを聞かなかった。吹き込む雨風に濡れた石段は滑りやすく、足元はおぼつかない。地上60mの空の上、吹き付ける風は強く、雨が髪を湿らせて滴り落ちる。コートもブラウスも濡ればそつて、スカートも足にまとわりつく。

いやはや。最後の最後にとんでもない化け物<sup>ラスボス</sup>が待ち受けていたものだ。残念ながらこしら健全な一般学生である。怪物と殴り合うスーパーパワーなんて持ち合わせていない。

「東西、東西!!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

「凱旋せよ! 凱旋せよ! 鞍馬の山より凱旋せよ!」

風に乗って、鞍馬会の残党たちの祈念が聞こえてくる。百鬼夜行の争乱の残滓、匿名の仮面を付けた幻想主義者たちが、最後の希望を求めて京都駅を目指して結集しているのだ。彼等にとつての救世主を求め、まるで救いの蜘蛛の糸に縋るように。

▽SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

▽SYSTEM>

▽SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

▽SYSTEM>

▽SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

▽SYSTEM>

▽SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

▽SYSTEM>

▽SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

▽SYSTEM>

<Anonymus>

【匿名】プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

【匿名】プライバシーの保護のため、映像を遮断します 【匿名】

</Anonymus>

彼等は、自分たち崇めるものが細かい論理で綴られたプログラムのコードである事を知っているのだろうか。あるいは、科学世紀の失望の果ての向こう側に、測定不能な真理を見出したのだろうか。希望を失った懐古主義者達の、仮面劇はなお、終わりの見えた部隊の続演を願い、祈りの声となって夜にこだまする。

ばきり。

もう一度、さっきの音。不可視のレイヤに身を包み、私を食い千切ろうと間合いを測っているのか——あるいは、今にも飛びかからんと大口を開けているのか。虚空を見つめ、震えているメリーの手が、ぎゅっと私の肩を抱きしめた。

その瞬間。脳裏を閃く天啓。

メリーには、あの化け物が見えている。——それなら。

相棒の肩を掴みその手を握って、叫ぶ。

<SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

</SYSTEM>

<SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

</SYSTEM>

<SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

</SYSTEM>

<SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

</SYSTEM>

<SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

</SYSTEM>

<SYSTEM>

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

</SYSTEM>

「メリー、私にも見せて！」

見えない怪物を撃ち殺す銀の銃弾なんて、私の手元にはない。けれど——メリーに見えているのなら、私にも見つける手段はある。

私を後ろ抱きにするメリーの掌を取って、自分の目へと押しつけた。途端、ぐらりと揺れた視界の向こうに、異形の化け物の輪郭が浮かび上がる。

「……視えた」

結界の境目を見るメリーの眼は、トリフネに行つて以来進化を遂げていた。接触すること他の人間にもその影響を与え、視覚の一部を共有することができる。それは、このだけでもにだって有効なのだ。

黒のエラーコードにまみれた醜惡な姿をたわませながら、『そいつ』はゆっくりと私を睨みつける。

角は鹿、頭は駱駝、眼は兎。

胴体は蛇、腹は蜃、背の鱗は鯉。

爪は鷹、掌は虎、耳は牛。

ありとあらゆる獣の特徴を、滅多やたらに繋ぎ合わせた、正体不明、理解不能の怪物。

【いる】と【いない】の合間に潜み、人々の恐怖の象徴として名前も姿もなく、ただ正体不明とされた一匹の妖怪。

この地で生まれ落ち、逃れることを叶わずに千年を数える京都の歴史に囚われて。その身

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

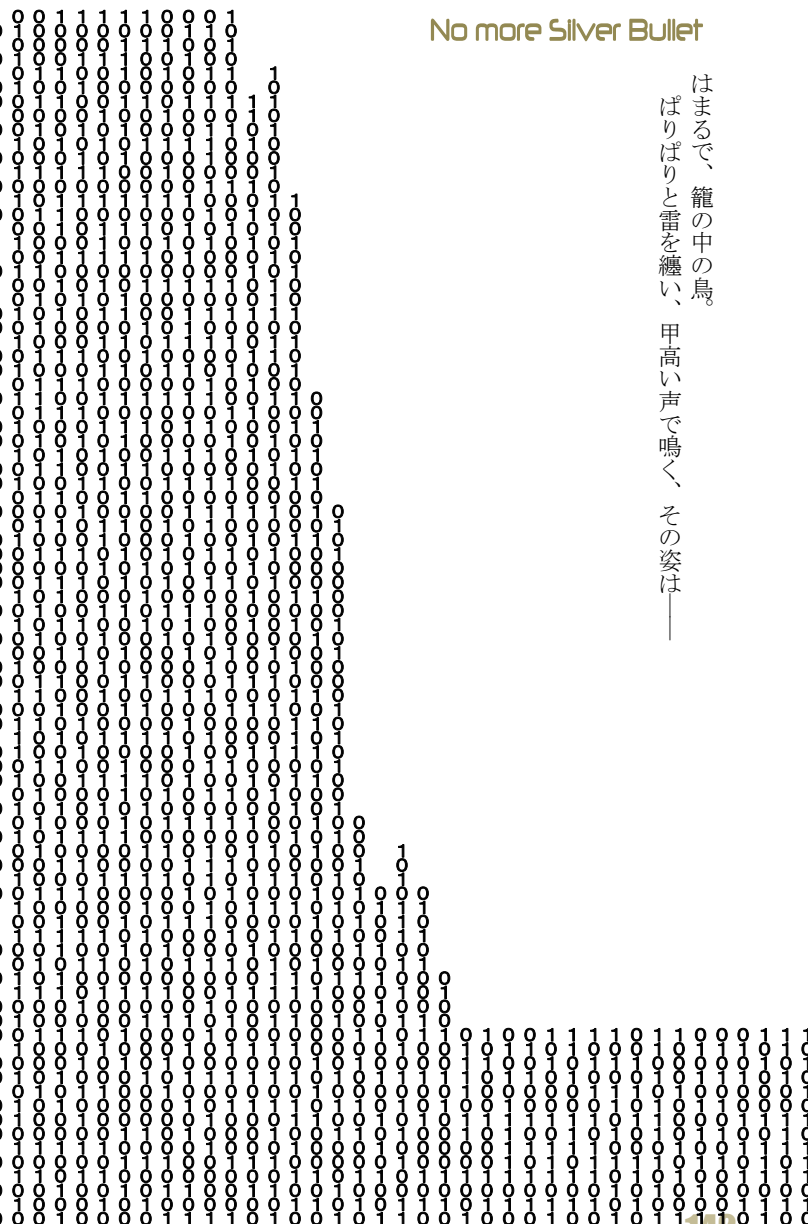
重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

重大なエラーが発生しています。再起動してください。

△SYSTEM△

はまるで、籠の中の鳥。  
ぱりぱりと雷を纏い、  
甲高い声で鳴く、  
その姿は――



No more Fear Bullet



化け物が首を振って天に吠えた。甲高いノイズが響き渡る。咄嗟に両耳を塞ぎながら、メリーの手を取ったまま身を起こした。これがこいつの鳴き声なのだろうか。痛む全身を引きずって、涙をこらえながら近付く化け物から必死に距離を取る。

【教授！ 見つけたわ！ 教授、返事して！】

通信機に呼びかけるが、応答はない。化け物の周囲に電流が取り巻き、小さな火花が散り始める。電子の塊——つまり雷。こいつはそれを操るのだ。残り少なかった電源がみるみる吸い上げられ、かろうじて聞こえていたノイズすらも弱々しくなり、耳に押し付けたスピーカーの音は、ほとんど幽霊の囁き声のようだ。

「蓮子、来るわよ！」

「もうっ、ここまで来て——!!」

メリーの手を取って走る。地面が弾け、高圧の電気が流れる。怪談がばしりばしりと音を立て——降り注ぐ雷鳴が、ちゅりちゃんから預かった避雷針を軋ませる。

【教授！ お願い返事して、教授！ ここに——】

声を枯らし、必死に通信機の向こうに呼びかける。ARさえ生きていれば私の現在地点なんてすぐに知らせることができるだろうが、それがかなわない今、できることは逃げ回るだけだ。

「蓮子、前！」

メリーの警句に顔を上げた瞬間、がくと足元が抜け落ちた。

バランスを崩した身体が、強かに地面に打ち付けられる。目の前にある段差に沿って上書きされた拡張現実の地面に気付かず、脚を取られたのだ。

脇腹が軋み、息が止まる。立ち上がろうとした右足首に激痛。動けない。

振り向いたメリーが手を伸ばす。オゾンの匂いがひととき濃くなる。

時間が粘性を帯び、視界から色が抜け落ちる。地面を薙ぐ雷光が、ひどくゆっくりと私の元へ迫ってくる。走馬燈というやつはこんなふうに見えるのだと、場違いなことに感心した。

ああ。こんな化け物に襲われるなんてトリフネ以来だ。あの時は半分夢の中だったから、多少の怪我也平気だったけれど——この見えない化け物に齧られてしまっても同じように済むのだろうか？

それでもせめて、何もせずに負けるものかと——手が自然と拳を握り締める。視えなくなつて、殴れないわけじゃないかもしれない。

「蓮子！」

メリーの悲鳴とともに、私は思い切り手をふりかぶり——

「——そうか。君は、この京都にいたのだったね」

声が、聞こえた。

私のすぐ後ろ、京都駅の屋根の上の、外。風の吹き荒れる空の上に、ふわりと浮かびあがるグレーのパーカーがある。彼女はし字のロッドをくるんと回し、その先に引っかけた青いペンデュラムを揺らしてみせた。



跳ねのけたフードの下から、ネズミ色の髪と共に露わになるのは、丸くて大きな耳。スカートの下からもくるんと長い尻尾が伸び、先端には小さなバスケットを下げている。その中に納まった白ネズミのアルくんが、チウ、と鳴いた。

「……やれやれだ。こちらも身内の不始末か」

ナズちゃんはつぶやいて、手の上の宝塔を高く掲げる。

瞬間、まばゆいばかりの閃光が、屋根の上から迸った。天上へと突き刺さる光が、京都の空を覆う分厚い雲を貫いて、わだかまる黒雲を残らず吹き飛ばす。

燦然と輝く、闇を払う法具の光が、雨風を纏い夜霧を纏う妖怪の、その姿を照らし出す。吹き荒れる風と雨の中。ぽかりと、京都の空を覆っていた仮想のレイヤが剥がれ落ちた。

その奥に覗くのは、満天の星空。

拡張現実と人工衛星に加工された偽りの空とは違う、本物の空。

空に見える全天の星から、美しい月から。

私の眼は、今の正確な時刻を、この場所の座標を、正しき星辰の時を知る。

「西暦二千六十五年、十一月五日、午前〇時四七分三三秒!!

北緯三四度九八分五四、五八秒、

東経一三五度七五分七七、五五秒!!

——教授!!——

【心配いらなわ。聞こえてる】

驚くくらいに明瞭で、力強い返事が、通信機の方こうから聞こえた。

全ては一瞬だった。御所の方角で膨らむ赤い光が、七つの巨大な十字架になって立ち昇る。

【節制】、【剛毅】、【信仰】、【正義】、【希望】、【思慮】、そして【慈愛】。七元徳の名を冠する光が、空の伽藍を吹き飛ばし、閃光の柱になって天を衝く。

崩れゆく仮想の大伽藍の下、御所に輝くは赤のウィンドウ。

教授の放ったプログラムコードは、拡張現実を介して現実と幻想世界の合間に溢れだし、京都駅の屋上へと殺到する。化け物を取り囲むように赤い十字架が何本も突き立ち、奴の居所を丸裸にした。

刹那。御所から放たれたコードの矢が、一直線に化け物へと放たれる。

黒雲を裂き、化け物へと突き立つ赤い矢が、異変の核たるエラーコードを狙いたがわず貫き——バグをデコードして対消滅。損壊したプログラムを残らず檻の中へと隔離して、無害なものへと書き換えてゆく。

後にはただ、燦然たる輝きの余韻と——

もの寂しくも不気味な、甲高い鳴き声が響くのみだった。

■■■ Sunday, November 15, 2065 at 11:14 ▼

&lt;Quotation&gt;

十日前、京都を襲った異常気象の原因は、事故調査委員会の報告に行って全大候型制御モジュールの暴走であったことが決定的となった。当該モジュールは大陸系財閥の資本注入を受け、欧州、北米の主導で開発されたものだが、そのプログラムの一部に紛れこんで到達不能コードの一部に誤記があり、エラーコードの原因となったと推測されている。これはいわゆる情報を食らう新種のキマイラと考えられ、電脳管理都市の新たな問題として今後も尾を引きそうだ。

今回の事故による被害損失は、市民達の恐慌による二次的な人為要素を除外しても十億新円にも及ぶと試算されており、事態を重く見た行政政府はヤクモクラウドの更新も視野に入れた法案を年内にも行つことを発表している。

&lt;News Sunday, November 15, 2065 at 10:52 NK&gt;

&lt;/Quotation&gt;

いつもの五条通りのオープンカフェ。京都の空は変わらずの秋晴れで、描画はドットの欠けもなく美しい。先の騒動などまるで一夜の夢のごとく過去のものとなり、科学世紀は今日もまた変わらぬ日常を送る。

A Rの復帰と共に、事件の真相は闇の中。教授を含む私達の活躍とそれに伴ういくつかの問題も内々のうちに処理された。超法規措置というやつで、政治的取引とか、教授の立場とか、色々裏で複雑なことがあったのだと聞いている。まあ、私達の眼の事もあまり表沙汰になつて欲しくはないので無難な落とし所だろう。

とはいえ、遷都以来の未曾有の重大事件。失われた真実を巡り、いくつもの噂が尾ひれを付けてネットスフィアを席卷している。陰謀論、都市伝説、妖怪、疑似科学——彼等の残した爪痕は、たしかに京都にかつての姿があったことを思い起こすに十分だった。

ネットの都市伝説を扱うボードを閉じて、吐息。

「ねえ、蓮子」

「なに？」

「あの子、結局誰だったのかしらね」

「……そうねえ」

あれからずっと、二人になるたび話の中心になるのはナズちゃんのことだ。私達が京都駅であの化け物と対峙した直後。彼女はまるで最初からいなかったかのように姿を消してしまっていた。最後に手紙が残されているでもなく、お別れの言葉もありはしない。

まるで、最初から会うべきではなかったとでもいうみたいに。

騒動で大ダメージを受けたクラウドサーバには事故前後の12時間ほどの記録が失われており、わずかに、破損したARグラスの貸与記録が、この街にナズちゃんとアルくんの存在を繋ぎとめている。

彼女がどこから来て、何をしていたのか——本当のところはよく分からない。なんとなく推測できることはあるけれど、あれこれ言葉を繋げてみても、どれも納得のいくような形ではないようにも思えた。

「それ、返しそびれちゃったわね」

メリーが示す鎖の先の八面体を、指に絡めて持ちあげる。ナズちゃんが置いていったもの一つのもの。しゃらりと揺れる鎖の先で、青いクオーツが小さく揺れた。

色々調べてみたものの、ペンデュラム自体は何の変哲もない水晶製。何か特別な機能が仕込まれているものではないらしい。

青い振り子の先端を覗きこみながら、冷めてしまった珈琲を飲み込む。

「ねえ、メリー」

「……なに？」

「しばらく、メリーの家に泊まっても良いかしら？」

「どうしたの？ ついに寝る場所もなくなっちゃったのかしら？」

悪戯っぽく笑うメリーに首を振って、鎖の先にぶら下がる八面体を広げた日本地図の上に

そつと垂らす。

「一緒に寝てないと、メリーが『あっち』に行く時、私も付いていけないじゃない？」

「……？」

まだ分かっていないらしきメリーに、小さくウインク。

「借りたものは、返しに行かなきゃいけないでしょ？」

青い京都の空の下。八面体のペンデュラムは、ほのかに輝きを伴って、くるくると地図の上に揺れていた。

<Correction>  
<error>NEW  
2 1  
【意】新しい  
【略】新欧州連合 New European Union </error>  
【意】鷓鴣。キマイラ。正体不明のもの。 </truth>  
</Correction>

↑ ↑ ↑ ↑

</SYSTEM>

Izayoi\_net version 3.9.81-b.3

System Close .....\*/

.....OK.

<SYSTEM>

(丁)

<SYSTEM>

お疲れ様でした。Izayoi\_netを終了します。

次に京都にお越しの際にまたお会いできることを楽しみにしています。

——より良き科学世紀の未来のために。

</SYSTEM>



## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『No more Silver Bullet -Reloaded-』は、公式とはだいぶ趣の違う科学世紀の京都を舞台に、秘封倶楽部の二人が稀代の天才・岡崎夢美教授や助手のちゆりちゃん、そして謎のダウザー少女と共に、京都の夜を脅かす正体不明の怪物と対峙する、当サークル40冊目のSS本となります。

タイトルをご覧いただければおわかりの通り、本作は元々、2012年の科学世紀のカフェテラス2で頒布したお話が元になっております。当時は折本として発行したのですが、いろいろ心残りのある作品でもあったため、この度東京秘封オンリーの開催に合わせてリライトという形になりました。

今作の表紙は、手書き動画「シヨボ女さとり」シリーズでおなじみのうー☆みん様に描いていただきました。嵐と異変の中、拡張現実の京都を駆け回る蓮子とメリーという、素晴らしいイラストをいただきました事を、心より感謝いたします。

また、作中の素材として YouMay 様の東方影絵体フォント、 苦様、raiga707/R-R 様の画像素材を使用させて頂きました。ありがとうございます。

執筆にあたりまして、辻堂基信氏、挟まり人氏、R i z a 氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

## 【参考文献】

- ・ニコニコ大百科  
(<http://dic.nicovideo.jp>)
- ・インターネットフリー百科事典 Wikipedia 日本語版  
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/>)
- ・ハーモニー  
ハヤカワ文庫 JA 著:伊藤計劃
- ・ザレゴトディクシヨナル 戯言シリーズ用語辞典  
講談社ノベルス 著:西尾維新
- ・シャドウラン 20th Anniversary Edition (Role & Roll RPG)  
著:ロブ・ボイル 翻訳:朱鷺田祐介, シャドウランナーズ
- ・「Ret:romancer」(RedTailCat「Viraja Aupamy」収録)  
桐生様
- ・「ラクトガールは八度死ぬ」  
相乗り回転ブランコ／卯月秋千様
- ・「幻想未満」  
草枕文庫／enclosed0 様
- ・「L4.UFONIA」  
La mort Rouge／仮面の男様

## 【仕様素材】

- 苦様 [pixiv\\_id=115746](#)
- raiga707／R-R 様 [pixiv\\_id=81555](#)
- 「東方影絵体」 YouMay 様 ([watch/nm13570868](https://www.pixiv.net/watch/nm13570868))

【奥付】

「No more Silver Bullet -Reloaded-」

初版:平成 27 年 2 月 21 日

境界から視えた外界-結-

オルハザカサンバンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者:銅 おりはあかがね

表紙:うー☆みん様

印刷所:(株)ポプルス様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方 project」の二次創作です。





著：銅おりは／折葉坂三番地  
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog>

表紙：うー☆みん  
<http://www.nicovideo.jp/user/1674336>



著：銅おりは／折葉坂三番地  
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙：うー☆みん  
<http://www.nicovideo.jp/user/1674336>